

兵庫県道徳副読本 中学校

心がつむぐ兵庫のきずな

心が か か か や く



心 かがやく 目次

留さんのボギー―宮本留吉―	1
コウノトリの郷	4
共に生きる心をもつて	10
《人物探訪》加藤文太郎「単独行の文太郎」	12
ひとすじの道―城ノブ―	14
手塚作品を貫くもの―手塚治虫―	19
夕やけ小やけの赤とんぼ―三木露風―	23
人としての修行―鶴澤友路―	25
語りかける目	29
《人物探訪》鈴木重胤「学問への姿勢」	32
明珍火箸	34
いもうと―和辻哲郎―	37
絶対に、こんなことで死んでたまるか	41
伝統をつむぐ―赤穂鍛通織り―	44
事典をつくった人―下中弥三郎―	49
《人物探訪》及川平治「及川先生の背中」	55

洋子の播州歌舞伎―伝統の若き後継者―	57
地図をもたない旅人―湯川秀樹―	63
我が言は万人の声―斎藤隆夫―	69
「ウラー！ タイシヨウ！」―高田屋嘉兵衛―	75
心がひとつに	82
《人物探訪》柳田國男「日本民俗学の創始者」	84
運命の木―姫路城の大柱―	86

留さんのボギー 宮本留吉

「留さん、パーやな。」

ボールがホールにポトリと落ちた時、同じ組で回っていた岡橋泰一郎が声をかけた。

「いや、ボギーや。」

と、留さんは言った。

その日の午後、勝負どころの十三番ホールはパー5のロングホール。留さんは、プロならだれでもそうであるように、四打で決めるバーディーねらいだった。しかし第二打はフェアウェイを左に外れ、小石まじりの砂地の上り坂のところへ落下した。ミスショットだった。第三打でグリーンのピンの近くまで寄せなければならぬ。留さんが打とうとした時、わずかに小石によって支えられていたボールがふいにコロコロと転がってしまった。ゴルフのルールでは、これも一打にカウントされる。

「ついてないな。」

留さんは舌打ちをした。

午前中はトップグループにいたものの、午後はリズムを崩し、じりじり後退していた留さん。優勝をねらうには厳しい状況で、この一打だ。留さんはやり場のない思いの中で第四打を打ち、グリーンにボールを乗せた。しかしピンまでの距離は遠い。ツアーパットで、ようやくボールを沈めた。

岡橋さんが、「留さん、パーやな。」と言ったのはその時だった。

「えっ……。」

フェアウェイから離れた砂地でのあの一打は、同伴者にも観客にも関係者にも、だれにも見られていなかったのだ。

岡橋さんの言葉は、留さんには意外だった。

ゴルフの戦いは一打を巡るし烈な戦いだ。だれにも見られていなかったから、知らん顔をしていれば、さっきの一打は帳消しになる。

留さんは、ホールからボールを取り出しながらゆっくり言った。

「いや、ボギーや。六打だ。さっきの砂地で三打目を打とうとした時に、ボールが動いてしまっ
たんや。」

留さんこと宮本留吉は、一九〇二（明治三十五）年、六甲山に近い、現在の神戸市灘区に生まれた。留吉とゴルフとの出会いは、宿命的なものだった。生家のすぐ近くに、日本で初めてできたゴルフ場である「神戸ゴルフ倶楽部」があったからだ。小学生のころから土曜日、日曜日にキャディーのアルバイトをした。遊びはもちろんゴルフだった。木の枝をクラブにして、空き缶を埋め込んだホールをめぐって打っていた。後年、クラブづくりにも腕を振った留さんの能力は、そのころから芽生えていた。小学校を卒業してすぐに本格的なゴルフの練習を始め、そしてプロになったのは、二十三歳の時だった。

留さんの十三番ホールでの出来事は、一九五一（昭和二十六）年の関西オープンゴルフ選手権競技でのことだった。

結果は、三人が同じスコアで並び、翌日のプレーオフに持ち越された。

プレーオフで二人を制して優勝したのは、留さんだった。

優勝を祝う歓声の中で、留さんは昨日のあの一打のことを思い出していた。

もし岡橋さんに「パーやな」と言われ、「そうだ」と答えていたら、いったいどうなっていただろう。ゴルフのスコアは自己申告である。

「パーだ。」

と、あの時言っていたら、数字の上では単独優勝で、プレーオフなどなかったはずだ。

しかし、もし、そんなことをしていたら、優勝どころではなかったのではないか。心が乱れて、それから先、とてもまとまなゴルフはできなかっただろう。

それだけではない。自分の心に大きなとげを刺したまま、これからプロゴルファーとして、いや、人間としての道を歩まなければならないことになる。今までに手にしてきた数多くの優勝や海外での活躍、華々しい実績も、きつと自分の心の中で地に落ちてしまったに違いない。

セレモニーの舞台に向かう留さんの姿は、りんとして輝いていた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

コウノトリの郷

二〇〇五（平成一七）年九月二十四日、「兵庫県立コウノトリの郷公園」で五羽のコウノトリが豊岡の空に放鳥された。約三千五百人が見守る中を、一羽、また一羽とコウノトリが空に舞っていく。「わあっ」という歓声が響いた。空を見上げる人々の表情は感動に満ち、輝いていた。

コウノトリを絶滅から救うために人工飼育に踏み切ったのが一九六五（昭和四十）年。二十四年後の一九八九（平成元）年、ようやくにしてヒナがかえり、その後ヒナが順調に増える見込みができた時、「野生復帰」に向けたプロジェクトが動きだした。その一つとして「コウノトリの郷公園」の建設が計画された。

コウノトリは翼を広げると二メートルにもなる肉食性の大型の鳥で、たくさんのおべ物を必要とする。しかし、当時の但馬の里山や田んぼの様子、農業のやり方は、コウノトリが野生で生息していたころとはまったく違っていた。そしてなによりも、川や田んぼでエサとなる魚やカエルを探すため、農家にとっては「稲を踏む害鳥」であるという問題があった。

野生復帰など夢物語だと、だれもが思った。

人工飼育に踏み切ってから放鳥まで四十年の時を必要とした。長い歲月だった。この間、人工飼育に情熱を注ぎ続けた人、東京から豊岡市に家族で移り住んで野生復帰を支えた研究者、ふるさととコウノトリのために奔走した地元の人たち、行政関係者……。数え上げればきりのないたくさんの人々の夢と情熱が、コウノトリの野生復帰への道を支え、一人一人にかけがえのない物語が生まれた。

そしてこの日、実る稲穂に影を映し、空を舞うコウノトリを、見上げている人がいた。

祥雲寺地区に住む稲葉哲郎さんは東京の大学を卒業し、東京で十年近く働いていたが、都会の生活になじめないものを感じて豊岡に帰ってきた。一九七〇年代のことである。稲葉さんは豊岡に戻って久しぶりに実家の農作業を手伝った。しかし、そのあまりの変化に驚きとまどいを感じた。手作業だった田植えや稲刈りは、機械化が進み格段に楽になっていたし、農薬を使うことで害虫は駆除され、稲の病気も減り、米の収穫量は大幅に増えていた。

「しかし……」と、稲葉さんはいぶかった。どこか昔の田んぼと違うような気がしてならない。雑草もなく、稲が美しく成長してはいるが、このふるさとの情景がどこか自分にはよそよそしく感じられた。

ある日、農薬を散布し終えた田んぼで、思わず息をのんだ。カエルや魚が白い腹を見せて、たくさん浮かんでいたのだ。

「そうか、そうだったのか。」

昔と何かが違うと感じたのは、田んぼにいるはずの生き物がいなくなっていたからだだった。

あぜ道でうるさいほど飛び交っていたバッタは、数えるほどしかいない。夜はカエルの鳴き声の大会唱だったのに、それもほとんど聞くことはない。夏の夕やみにほのめくホタルの光も、めつきり少なくなっていた。

子供のころは、楽しかった。ウナギ、ナマズ、コイ、トンボ、バッタ……。いつも山や川で友達と遊んでいた。暮らしの中に数え切れないくらい生き物がいた。

昔の思い出からふと我に返り、白い腹を見せるカエルの無残な姿にもう一度目をやった稲葉さんは、はっとした。私たちが食べる米は、このカエルを、こんなふうにして殺してしまう「水」を吸い上げて育

つ稲ではないか。これでは田んぼの生き物の命だけではなく、人間の生命にも害を及ぼすに違いない。農業は人間の「いのち」を支える仕事だ。だとしたら、このようなやり方を続けていていいはずがない。稲葉さんはそう思った。

しかし、定着して安定しつつある農業のやり方を変えるのは、よほどの勇気と覚悟がいることだった。稲葉さんは、何をどうすればよいのか、その答えを求めて、考え続けた。

「コウノトリの郷公園」建設の候補地として祥雲寺地区の名があがったのは、稲葉さんがそんなことを考えている時だった。

地区の人たちにとつて、これは悩ましい問題であった。

コウノトリは稲を踏み荒らす害鳥ではあったかもしれないが、一方で、豊岡の農家の人たちが誇らしさや懐かしさを抱いているふるさと鳥だった。

「日本では絶滅したコウノトリが、自分たちの住む土地でまたよみがえるのか」と考えると心は揺れる。けれど、人と自然が共生することが目的の公園を建設するということは、ただ土地を提供するというだけのことではない。コウノトリが生きていくための環境を考えた農業のやり方を工夫していかなければいけないということだ。近代的な米づくりの方法によつて、田んぼも整備され、昔の重労働からも開放され、安定した収穫が得られるようになって今、反対する気持ちがわき上がってくるのは当然だった。

地域の農家の人たちと、「コウノトリの郷公園」についての話し合いが始まった。稲葉さんはそこで、日ごろ自分が農業について考えていることを思い切って口にしてみた。すると、効率だけを目ざす農業ではいけないと考えている人が他にもいることが分かった。ただ、どうすればよいのかがだれ

にもわからない。そこで、まずは「環境にやさしい農業」について勉強してみようということになった。何度も勉強会を開き、話し合いをもった。決断に至るまで二年間、あらゆる事柄について話し合った。絶対の自信はないが、とにかく公園の話を引き受け、自分たちの地域づくりをしようという気持ちで、固まった。

「これできつと、変わる。」

稲葉さんは、ふるさとに帰ってきた時のことを思い出していた。

話が決まると、区長さんや稲葉さんを含めた有志の人たちは研究会を立ち上げた。

稲葉さんたちは、「郷公園と一体的な活動を推進し、コウノトリと共に暮らせる環境を創ることは、そこに住む人間がすばらしい自然環境を取り戻すことになる。その結果として、生産された農産物は人間の生命を守る食の安心・安全につながる」という考えを柱として、活動を進めることにした。

この考え方に沿って、さまざまに試みがスタートした。土地の整備が行われた。朝市の会も発足した。そして、二〇〇二（平成十四）年には祥雲寺地区全戸加入による営農組合が結成され、農業のやり方を地区一体となって考える仕組みもできた。農業だけではなく、人々の心も、少しずつ変わっていった。

二〇〇三（平成十五）年になって、稲葉さんは、無農薬・無化学肥料栽培の米づくりに初めて挑戦をした。農業の指導員が協力してくれたが、それでも夏になると田んぼにはコナギとクログワイという雑草がびっしりと生えた。

「やつかいな草が生えてしまった。なんとか取らなくては。」

しかし、半日かかっても、取り除けたのはたったの一分だけだった。

「全部を取り除くのについたい何日かかるんだろう。農薬を使えば三十分で事は済むのだが……。」
思わずため息が出た。しかし、稲葉さんは農薬を使わなかった。ひたすら夏の田んぼで草取りをした。指導員の方たちも手伝いに来てくれたが、すべての草を取りきるのに二十日かかった。想像していた以上に無農薬栽培は大変なことだと、身をもって感じた。

だが、秋になって驚くことが起こった。稲を刈りはじめると、あちらの株からもこちらの株からも、カエルがいつせいに跳び出してきたのだ。いつたいどれだけいるのか、このごろでは見たこともないカエルの大群だった。

「これなら、コウノトリは戻ってくる事ができる……。」
稲葉さんは、飛び跳ねる田んぼのカエルを眺め、思わず笑みがこぼれた。

その年の田植えから収穫まで、周りの人々は、稲葉さんたちが苦勞して作業している様子を否定的に見ていたに違いない。ところが次の年から、新たに無農薬栽培に取り組む人が現れた。稲葉さんたちのやり方を見ていて、手間もかかり不安もあるが、自分たちの健康や将来の子供たちのためになると共感したのだという。

こうして、コウノトリと共に暮らすための地域づくりが少しずつ、一歩ずつ、しかし確かな足取りで進み始め、ついに放鳥の日を迎えたのである。

放鳥から五年がたった豊岡は、コウノトリがいることが当たり前の町になっていた。

豊岡市の農家の取り組みは、「コウノトリを育む農法」として全国から注目されるようになった。難しいと考えられていた無農薬栽培についても、工夫と研究が進んだ。

「害鳥と考えられていたコウノトリが、人間にたくさんのことを教えてくれたのだ。」

稲葉さんは、そう思った。

「農業も、自然も、奥が深いです。」

川ではしゃぎながら魚をとっている子供たちがいる。田んぼには、えさをついばむコウノトリの姿がある。今では当たり前になりつつあるそんな光景を、稲葉さんは感慨深く見つめて言った。

「まだまだ、これからですね。」

そのひとみも表情も、さわやかに輝いていた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

共に生きる心をもって

「チヨンスギ！ チヨンスギ！」

父と母の必死に私を呼ぶ声に応えることもできず、私は今までに経験したことのない激しい揺れの中、痛みも忘れて足の上ののったテレビをどけると、とにかく外へ出なければと、階段をかけ降りました。しかし、私はそのとき、まだ、これが一瞬にして五千人以上の人々の命を奪った大地震だと、夢にも思っていないませんでした。

私の住む尼崎で、神戸や芦屋、西宮の惨状を知ることができたのはテレビの画面でした。刻一刻と写しだされる様子に、私は心の中が真っ暗になりました。私の通う朝鮮学校には、西宮や宝塚から通う生徒も大勢いるのです。そして、もうひとつ私の心を横切ったのは、以前、学校で聞いた関東大震災のことでした。地震の後、「朝鮮人が井戸に毒を入れた。」とか、「家に火をつけている。」というデマのせいで、罪のない数千人の朝鮮の人たちが虐殺された事件です。

しかし、私のそんな不安は、十日後に、ようやく再開された学校で打ち消されました。学校には、校舎の全壊した神戸の朝鮮学校から、多くの生徒たちが臨時転校してきていました。私は、クラスに転入してきた友達とすぐに仲良しになり、地震ことや、その後の電気も通じず、水もでない大変な暮らしを聞くことができませんでした。避難所になった学校の体育館では、日本人も朝鮮人もわけへだてなく、みんな役割を分担して協力しあっていることや、朝、チヨゴリを着て学校へ行くときに、日本のおじさんやおばさんから、「いつてらっしゃい。」とか、「がんばつといでや。」と声をかけてもらったのが、すごくうれしかったこと。そして、何よりも私が驚いたのは、今まで、何十年も目の前にある

朝鮮の学校に足も踏み入れたことのなかった近所の日本の方々、地震後、すぐ開放された朝鮮学校に避難し、今では、親せき以上に親しくなり、いっしょに助け合っていることでした。

私にも何か役に立てることはないだろうかと、友人たち、さらに母にも相談しました。その結果、避難所から通う友人たちのお弁当をみんなで分担して作ることにしました。母は、近所の避難所に配るおにぎりやキムチを多くのオモニたちと徹夜で作って持つていきました。男子は、みんなで集めた救援物資を自転車に積んで神戸まで運んでいきました。それは、ボランティアという程のものではありませんが、人を助けてあげるといっても、みんなの笑顔が見たいから、そして、そのほほえみが自分の心を温かくしてくれるからです。

私の学校にも、毎日のように全国の同胞たちだけでなく、日本の人たちから救援物資が届きました。奈良の幼稚園から送られてきた筆箱の中には、かわいらしい字で、「じしんにまけず、がんばって。」と大きく書かれた手紙がはいつていました。去年、私の学校の女生徒もチヨゴリを着ていると、石を投げられたり、いやがらせを受けたりするという事件が相次ぎました。しかし、その時も、多くの励ましを下さつたのは日本のみなさんです。そして、今度の地震でも、私たちは日本のみなさんから多くの貴重なことを学びました。

人間を助けられるのは、人間しかいないということばが今、私の心の中にしつかりと根をはつていきます。違うからといって避けたり遠ざけるのではなく、共にこの社会に生きる人間として違いを尊重し、自分のできることから助け合い手を取り合っていく、そういう社会を築いていくこと。そのためにも、もつともつと多くのことを積極的に学び、体験していこうと思います。共に生きる心をもつて、みんなで歩いていきましょう。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

単独行の文太郎

小説家新田次郎は、加藤文太郎を「孤高の人」と評した。孤高とは、「一人だけ周囲から気高く抜きん出て高い境地にいる」という意味である。加藤文太郎とはそういう人物であったと新田は言うのである。わずか三十一年で生涯を閉じた加藤文太郎はどういう境地に達していたのであろうか。

*

加藤文太郎は、一九〇五（明治三十八）年に浜坂町、今の新温泉町で生まれた。日本海を眺めて育った文太郎は、海の好きな少年だった。浜坂尋常高等小学校高等科を卒業した十五の春に、文太郎は三菱内燃機製作所に就職して、一人で神戸に出てきた。暮らし始めた神戸で、北側にある山に登っては海を眺めた。郷里を遠く離れて一人で生活を始めた十代半ばのまじめな少年文太

郎にとつて、寂しさから逃れるすべは他にはなかったのであろう。

海は情を慰めてくれる。

仕事を終えてから日暮れまでの短い時間に、海を眺望できる高台までの急峻を前屈みになつて駆けるように登つていく彼の姿を想像すると哀しく切ない。

神戸の地形は山から一気に海に下っている。毎日のように海から高台に駆けるように歩く日々が、自ずと文太郎の足と腰とを鍛えることになつたのではないだろうか。

文太郎ははず抜けて足が速かつたそうだ。走るのではない。歩くのである。これもきつと、海を見るためにひたすら駆けるように歩いたことが、彼の天分に拍車をかけたに違いない。またこの歩き方が寂しさを忘れ、寂し

さに堪える道であることを、彼は学んだのかも知れない。

しかし、こうまでして眺める海は、このころの文太郎にとつてはまだ見つめる景色であり、ただ眺める自然であった。挑む対象としての自然、格闘する自然、包まれる自然ではなかった。彼は次第に山に惹かれていった。

彼は海を愛する情の人であるばかりではなく、否、それ以上に意志の人、それも強靱な意志の人になつていく。

*

彼が二十歳の時のことである。ある休みの日のこと、午前五時に和田岬の会社の寮を出て、市内を歩いてまず須磨に行き、敦盛塚の所から須磨アルプス、高取山、再度山、摩耶山、六甲山、東六甲宝塚を縦走して、さらに西宮に出て街道を神戸に入り和田岬に帰るま

で、合計百キロメートルを歩き通して帰ったという。

彼がいかに強靱な意志を持ち、また、ひとたび目標を立てれば、それを必ず実行せずにはいられない人であることを示している。

*

当時の登山は裕福な人たちの趣味的な要素があった。登山靴も登山服も用具も高額だった。しかし文太郎は、地下足袋で山に登った。服装も、あり合わせのものを自分なりに細工した。それだけでも異色だったが、文太郎の登山の特徴は「単独行」だった。今もそうだが、登山は「パーティー」といつて何人かのグループで山に挑むのが普通である。互いが協力して滑落の危険を少なくしたり、作業を分担して疲労を少なくすることができると。さらに孤独を感じることも少なくてすむからである。

しかし、文太郎はいつも一人で山に向かった。そこにはいくつもの理由があった。わずかな会社の休みにしか山に登れない彼の境遇が大きく影響している。また他の追隨を許さぬ速さで歩

ける彼としては、一人で登った方がより多くの山に挑める。彼にはいつの日かヒマラヤを征服したいという夢があった。そのためにはより多くの山で豊富な経験を積む必要があったことも否めない。彼の単独行は一見大胆不敵であるが、実際には細心で用意周到であったことが登山家の間ではよく知られている。

*

一九三一（昭和六）年、文太郎二十六歳の一月のことである。文太郎はそれまでだれも考えたことのない富山県から長野県まで激寒の北アルプスの単独縦断を試みて成功した。列車で神戸に戻ってきた彼は新聞記者に囲まれた。しかし彼には意味がわからなかった。自分はただ冬山を一人で歩いただけで、それが偉大なことだなどと思ってもいなかった。彼にとつてそんな記録など、どうでもよかった。名声などにとん着しない、そんな生き方の境地に達していたのである。世間は他人との比較で人を評価したが、彼はおそろく自分をそんな目で見たことはなかった。

であろう。ただ、「山は、山を本当に愛するものすべてに幸せを与えてくれるものだ」と信じて、厳しい自然と孤独を愛する自分自身を見つめていたに違いない。

その意味では新田次郎のいう「孤高の人」という相対的な評価すら、彼には関係がなかったと思う。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ひとすじの道 城ノブ

一九一五（大正四）年、年の瀬のある日。ノブの手には、よれよれになった新聞が握られていた。それらに何度も何度も繰り返し読んだその記事のことが、ノブの脳裏を離れなかった。

淡路島洲本から神戸に向かう定期船で若い女性が二歳の幼児を抱き、海へ身を投じた。嫁いだ先の家庭での居場所を失い、絶望してのことだったと、その記事は伝えている。

ノブは、その記事のことが頭の中から離れず、胸が痛んだ。

このような人たちのために、自分にできることが何かないだろうか……。

ノブが新聞の記事に衝撃を受けていたころの日本は、第一次世界大戦の影響で、社会も混乱していた。まだまだ女性の社会的地位は低く、男性が圧倒的に優位な社会で、海に身を投じた人のように、つらい思いをしている女性が、たくさんいたのだ。

城ノブは、新橋から横浜までの鉄道が開業した年、一八七二（明治五）年に伊予（現在の愛媛県）に生まれた。父は長崎の鳴滝塾でシーボルトに学んだ医者だった。ノブは幼いころから神童といわれるほど才能があり、女子に学問など無用とされる時代に、松山女学校に学びながら漢学の塾へも通った。学校と塾がある松山の町は家から三里ほど離れていたが、ノブは歩いて通った。遠い道のりを女子の一人歩きは危険だと、はかまをはいて男子の格好をして通ったといわれる。

松山女学校でキリスト教と出会ったノブは、在学中に洗礼を受けた。しかし、まだまだ世の中は異国の宗教に寛容ではなく、西洋医学を学んだ父でさえそれを許さなかった。ノブは、家を出た。

その後、日本各地で伝道や教師などの仕事をし、年号が明治から大正になった年、ノブは神戸にや
つてきた。同郷の人が経営する神戸養老院でお年寄りの世話をすることになったのだ。
この時からノブは、生涯を神戸の地で過ごすことになる。

年が明けた。

ノブはまだその記事のことが頭から離れなかった。養老院での仕事を終えると、毎晩、そのことを
考え続けていた。

「世の中には、この人のように虐げられている女性がたくさんいるに違いない。このような人たちを
救うために、私にできることはないのだろうか……。」

ある晩、ノブはふと、新聞を握りしめている自分の手を見た。

「そうだ、この手だ……。」
自分が行動すればよいのである。

「この手を、辛い思いをしている女性たちに差し伸べることができるではないか！」
そう考えると、ノブはもうじつとはしていなかった。さっそく神戸の下山手通に小さな

家を借り、女性たちが身を寄せるための居所を準備した。一九一六（大正五）年のことである。

ノブが次にしたことは、世間でも話題になった。境遇に悲観して自ら命を絶つ女性がたくさんいる
ことから、須磨の海岸に、

「死なねばならぬ事情のある方は、一度来てください。ご相談にあずかります。」
と書いた立て札を掲げたのだ。

一度きりの人生を、あきらめないでほしい。

不幸な女性たちを救おうと、ノブの懸命な活動が始まった。

その冬の、ある夜のことである。冷たい雨が降っていた。

一人の女性がノブの小さな家の前に立った。

青白い顔をして、ずぶぬれの全身が震えていた。

ノブは静かにうなずき、女性を家の中へ招き入れた。そして胸に抱き寄せ、

「よくここまで来てくれました。」

と、ささやいた。ノブのぬくもりに、女性は声を上げて泣いた。

「さあ、今夜は早く休みなさい。明日、ゆつくり話を聞きましょう。」

ノブは女性の身体を手ぬぐいでふき、床に就かせた。

一夜明けて、ノブは女性の手に自分の手をやさしく重ねた。ノブの手のぬくもりがじんわりと女性に伝わっていった。その女性は静かにこれまでのことをすべてを話した。

「よく話してくださいましたね。もう心配いらないわ。しばらくここでゆつくりなさい。」

その日から、女性は、ノブの小さな家の住人の一人となった。

ノブに救いを求めてやってくる女性は、あとを絶たなかった。子供を連れている者も多かった。ノブは一人一人に寄り添い、語りかけ、話を聞き、そして心で包み込んだ。

過酷な借金の取り立てや、残酷な暴力から逃げてきた女性もいた。追っ手がやって来て、ノブに詰め寄ることもあった。しかし、ノブはひるまなかつた。両手を広げてすさまじい気迫で立ちはだかつた。

やがて、家の中に女性たちの笑い声がもれ、子供たちの元気な声が響くようになった。

「しかし……」とノブは思案した。

この家は、彼女たちが逃げ込んでくる一時避難の場所ではあるが、いつまでもここに居てよいものではなかった。新たに生きていく道を求めなければならぬ。ノブは、自分の仕事は女性たちを自立へと導くことだと思っていた。中には、駆けこんできて怠惰な生活を送ったあげく出て行き、結局昔と変わらぬ生活に戻り、音信不通になってしまふ者もいた。これでは、意味がない。

女性たちが本当に救われる道はないものか。ノブは多方面に声をかけ協力を要請した。

そのかいもあり、ノブの活動を理解し、支援してくれる人たちが現れてきた。少しずつだが、女性たちの働く場を見つけることができるようになってきた。

あの夜、ずぶぬれになってやってきた女性も、紹介を受け、地方の女学校の教師の職を得て、この家を巣立つことになった。

「これからですよ。しつかり生きるのですよ。」

ノブは、並んで立つ彼女の背中をそつと押した。

「ありがとうございます。」

彼女を見送りながら、ノブはまっすぐな坂道の遠く向こうに見える海を見た。深々と頭を下げた彼女は、何度も何度も振り返りながら坂道を下りて行った。

生きる希望をよみがえらせるために人々に差し伸べたノブの手。あの、よれよれの新聞を握りしめていた手も、年齢を重ね、しわが深くなっていていったことだろう。そのしわの一つ一つに、ノブに救われた人たちの感謝の思いが刻み込まれているに違いない。

ノブは、八十七年の人生を社会に尽くして今、芦屋の墓地に眠っている。
その墓石には、こう刻まれている。

「受けて忘れず 与えて思わず」
ノブの、ひとすじの生き方そのものである。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使
用することを禁止します。

手塚作品を貫くもの 手塚治虫

昭和というより、我が国の漫画界の歴史における巨匠である手塚治虫さんは、五歳の時から宝塚市で育った。医学部へ進み、医者になった手塚さんだったが、自身が進みたいと願う道への思いを捨てることができなかつた。

手塚さんは戦後、漫画家としての道を歩み出すことを決意する。

「鉄腕アトム」「ジャングル大帝」「ブラック・ジャック」「火の鳥」など多くの名作を生み出し、子供たちだけでなく、大人にも大きな感動を与えた。それらの作品に貫かれた手塚さんの思いとは、いったい何だったのだろうか。

手塚さんが旧制中学に通っていたころの日本は、戦争の末期だった。

漫画家としての手塚さんに大きな影響を与えたものとして、少年時代の昆虫との出会いはよく知られているが、感受性の強い青年時代を、戦火と終戦の混乱の中で過ごした体験も、後年の手塚さんの作品の発想に大きな影響を与えている。

終戦の年、一九四五（昭和二十）年、学校での授業は中止になり、手塚さんは学徒動員として大阪の軍需工場で働いていた。その日はたまたま監視塔で見張りの仕事をさせられていた。火の見やぐらのような塔の上で、高いところから空を監視して空襲に備えるのだ。普通は空襲警報の前に警戒警報があり、監視員も下りていって工場で働く人たちに知らせ、退避ごうに避難することになっていた。

三月に入ってから何度か空襲に見舞われていた。そして、六月七日、その日の大阪の空は、のどかに感じられた。手塚さんは空を見上げ、「きょうは静かだ……」と大きく伸びをした。

すると、遠くでかすかにごう音が聞えたように感じた。

「なぜだ……、警報のサイレンも鳴っていないのに……。」

手塚さんは空の向こうに、目を凝らした。

それは機影に間違いなかった。

B29が大編隊を組んでこちらにやってくる。いつもは、それがやってくるずっと前に鳴り響くはずの警戒警報が、この日に限って沈黙していたのだ。その巨大な一団の影がもうすぐそこまで来たという時になってやっと、けたたましくサイレンが鳴った。ここまで接近されての空襲警報だ。

もう、手塚さんが監視塔から下りる時間はなかった。すでに上空に飛来した怪鳥の胴体からは、まるでフンのように次々と黒い物体が落下してきた。焼夷弾である。落下中にパツと裂けて広範囲に散らばり、破裂して一面を炎の海にしてしまう爆弾だ。手塚さんは監視塔の上で頭を抱えてうずくまつた。

「だめだ、もう死ぬのだ！」

焼夷弾の一つが手塚さんの体のすぐ横を通り、監視塔の台をつき破っていった。

しばらくして、手塚さんはそっと起き上がってまわりを見た。工場全体が炎に包まれていて、空を赤く染めていた。

警報が遅れたから、工場には避難しきれなかった人がたくさんいるに違いない。炎は天井を突き破り、すさまじい勢いで一面に広がっていた。

「まだ、自分には命がある……。」

手塚さんは真つ青になって、無我夢中ではしご段を駆け下りた。

やはり逃げ遅れた多くの人が倒れている。おそらく死んでいるのだろう。

「何としても助かりたい！」

手塚さんは必至になって走った。まだ上空をB29は飛び交っている。

走りながら、手塚さんはこの世のものとは思えない光景を見た。逃げる人々にも容赦なく焼夷弾は降り注いだ。手塚さんは工場の近くを流れる淀川の堤防まで逃げた。

しかし、そこも悲惨な状況だった。近くで飼われていた牛たちと一緒に、たくさんの人が倒れて死んでいた。

夢を見ているのではないかと、手塚さんは我が目を疑った。

「これは地獄だ……。」

手塚さんは、B29の編隊が去った後、ぼう然と堤に立ち尽くした。

「あの焼夷弾が、もう少しずれていたら……。」

手塚さんは、自分が死ぬという恐怖を目の当たりに体験した。

黒い焼夷弾が落下してくる様子を思い出し、身震いした。

「生死の境目など運命としか言いようがない。」

手塚さんはそう思うのだった。

八月十五日、正午にラジオで天皇陛下の声が流れた。手塚さんは、何事かわからないまま聞いて、午後大阪に出た。

戦争が終わったことを、街行く人の会話で知った。

「戦争が終わった……？」

手塚さんの胸に、信じられないという気持ちと、言いようのないむなしさが込み上げてきた。

「あの大空襲の日の死体の山は何だったのか。」

暗くなつた大阪の街を手塚さんは歩いてきた。

戦争が終わつたとたん、街はこうこうと明るく照らされていた。

「どこにこれだけの電灯が残っていたのか……。」

手塚さんは立ち尽くし、その光景に涙した。

手塚さんは、歳月とともに、戦争の体験の記憶がだんだん影を潜めていくことを感じた。世の中の人も、あの戦争を忘れかけていると思つた手塚さんは、戦争の恐怖を人々の記憶にとどめようと、生命にこだわつた「アドルフに告ぐ」を描いた。

自分の作品のテーマには、死を目の当たりにした悪夢のような体験を無意識に描いているものと、生いと、手塚さんは語っている。

「生きなさい、力の限り生きなさい。」

これは「火の鳥」にある一節である。

手塚さんは、あの空襲の夜を思い出していたに違いない。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使
用することを禁止します。

夕やけ小やけの赤とんぼ

三木露風

「夕やけ小やけの赤とんぼ」の歌詞

子供のころ、この歌を口ずさむと、何かもの悲しい気持ちになったものである。歌詞もメロディーも、哀愁がこもっている。

大人になってから、日本の名曲と言われるこの歌は、親と離れ離れになった幼子の心情をうたったものだを知った。

この詩を書いた三木露風は、龍野の人だ。

露風は本名を操といった。操が五歳の時、彼の母と弟は事情があつて龍野を去り、鳥取の実家に戻ってしまった。取り残された操は、祖父のもとに引き取られ、子守りの「姐や」に日常の面倒をみてもらった。

もちろん、幼い操がこの詩を書いたわけではない。一九二一（大正十）年、露風三十二歳の時に童謡集「真珠島」で発表されたものだ。

家族というものは、居ればそれは当たり前前のことに思え、普段はその存在を深く考えたりしないものである。

しかし、母と弟が自分のもとを去り、ひとりきりになった経験をもつ露風には、家族とは居ることが当たり前ではない存在であったのだろう。長じてもなお、幼いころの孤独で空虚な思いは、心の奥から消えることがなかったに違いない。

「きつと母さんは、帰ってくる」

と、幼い操は、母の里へ続くもみじ谷へ毎日遊びに行った。そこで、来る日も来る日も、母の帰りを待った。夕やけに染まった西の空を、一人見つめる操。

龍野の美しい風景と、操のさみしい思いが歌となった。

日本中のだれもが歌ったことがある「赤とんぼ」。

露風の思いに寄り添いながら、改めてこの歌を口ずさんでみる。母のぬくもりを求め、その帰りを待ち続けた操の切ない思いが伝わり、いつの世も家族とはかけがえのないものであるのだと、しみじみとした気持ちになる。

居ることが当たり前ではない家族。

露風の幼年のころの切ない思いが、時を超えて私たちに語りかけてくる。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

人としての修行 鶴澤友路

「昔は昔、今は今。」

義太夫節三味線奏者鶴澤友路師匠は、さばさばしたものである。

「私ら若いころは師匠に教えてもらうたことなんか、一度もありませんでしたわ。芸は見て聞いて盗めってね、そういうもんでした。」

九十代半ばを過ぎた師匠は割り切っている。

「そんなことしていたら、今の人はだれもついてきません。厳しく弟子に向かうことよりも、浄瑠璃三味線を伝えることが大切ですからね。」

師匠は、もう自分には時間のないことを十分承知している。元気なうちに、伝えることができるうちに、この芸を継承させたいのである。

穏やかな表情の中にも、三味線の芸に対するき然とした姿勢を感じさせる師匠。

これは師匠が話してくださった、若いころの話である。

友路が淡路人形座の一員として義太夫節三味線の修行を積んでいた十五歳のころ、すでに竹本君香という芸名をもっていた。高座に上がることもしばしばで、その腕はかなりのものだったという。

当時、庶民の文化的娯楽として地域に定着していた浄瑠璃の人気は高く、けいこをする友路のばちさばきにも熱がこもった。

ちようど淡路人形座が四国を巡業している時のことである。友路に相三味線の声がかかった。太夫は有名な徳島の豊竹呂調である。友路は舞い上がりばかりに喜んだ。巡業といえども舞台で豊竹呂調師匠の相三味線が務められるのは光栄なことである。きつといい演奏をしてみせる、そう張り切っていたのだった。

すると呂調に、

「まだ十五歳の子供やないの……。相三味線なんてあほな。わたしや、語りませんよ。」
と言われてしまった。目の前で言われた友路はうつむいた。相手は有名な呂調、周りの人たちも返す言葉がない。友路の目からは、大粒の涙がこぼれた。

このうわさは、友路のふるさと淡路島にいる母の元へも届いた。

淡路に戻った友路は、母の慰めの言葉を期待していたが、
「三味線の腕を磨くことも大切やけどな、人から信頼されるような人間に自分を磨くことも大事なんやで。人としての心がすばらしければ、芸も上達するんや。」
と言われた。

「辛抱も、普通の辛抱やないで。人にできんような辛抱せな。」

そう言つて、友路を励ました。

友路は、母の言葉に勇気づけられた。

「よし、日本一の師匠について修行しよう。相三味線はお前じゃなければだめだと言われるような三味線奏者になろう。」

友路は、女性の弟子はめつたにとらないという宗家鶴澤友次郎に頼み込み、内弟子となった。そのけいこの厳しさは友路の想像をはるかに超えるものだった。

しかし、彼女はけいこに耐え抜き、短い期間で「友路」という名を友次郎師匠からちようだいした。これは、だれにでも認められる一流の三味線奏者になったということを証明する。故郷淡路島にもこの情報は届き、地元の人々の喜びもひとしおだった。

地元では友路の公演会をやるうという企画がもち上がった。太夫はあの徳島一と言われる豊竹呂調にお願いしようということになった。しかしその呂調には、

「友路？ それはあの時の君香のことやろ。君香の三味線じゃお断りします。」
と、相手にされなかった。

「なんでやのん？ なんて認めてくれへんのや！」

その悔しさは、別の太夫と組み、その太夫と浄瑠璃を成功させることにぶつけるしかなかった。

悔しい思いをおさえ、精一杯演奏した友路の三味線と太夫の語りは一体となり、会場の人々を魅了した。

それでも、呂調に「友路に相三味線を頼みたい」とは言ってもらえなかった。

その日の夜、友路は一人考えた。

「なんでやろ。腕は自分で言うのもなんだが、相当なものになっている。なのになぜ……。」

その時、あの母の言葉がよみがえってきた。

「……人として、人から信頼されるような人間に自分を磨くことが大事なんやで……。」

友路はふと、宗家鶴澤友次郎の三味線の、人の心に響く、語るような音色が聞えたような気がした。

「人として……。」

友路は、母の言葉をつぶやいた。

「呂調師匠は、私の三味線の腕を認めてないのではないんだ。そうではなくて……。」

そのことに気づいた時、友路の呂調に対する反発心が、すつと潮が引くように消えていった。芸の技をとやかく言う前に、もっとしななければならないことがあった。

次の日の朝、真新しい足袋をはき、心の背筋をピンと伸ばし、友路は豊竹呂調のいる宿へ向かった。

その後、義太夫節三味線奏者の第一人者として長きにわたって活躍し続けてきた鶴沢友路さんは、一九九八（平成十）年、人間国宝に認定された。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

語りかける目

一月二十三日、私は二回目の出勤をした。

任務は長田署管内の救助活動・遺体捜索。そして、村野工業高校体育館における遺体管理と検視業務の補助であった。仮の遺体安置所になった体育館は、たくさんの遺体と、それに付きそう遺族であふれていた。

そんな中で、一人の少女に、私の目はくぎづけになった。その少女は、ひざの前に置いた、焼け焦げた「ナベ」にじつと見入っていた。泣くでもなく、哀しむでもなく、身動きもせず、ただじつと見入っていた。

私は、その少女に引かれるように近寄っていった。「ナベ」の中は、小さな遺骨が置かれていた。「どうしたの。」

思わず問いかけた私の一言が、その少女を泣かせてしまった。どつとあふれだした涙をぬぐおうともせず、懸命に私の目を見つめ、とぎれとぎれに語り続けた。「ナベ」の中は、少女が拾い集めた母の遺骨であるという。

その夜（一月一六日）も少女は母に抱かれるように、一階の居間で眠っていた。何が起こったかも分からないまま、気がついたときには母とともに壊れた家の下敷きになって、身動きもできない状態になっていた。それでも、少女は少しずつ体をずらし、何時間もかけて脱出できた。家の前に立って、

何が何だかわからないまま、どの家も倒れているのを見た。多くの人が、何かを叫びながら走り回っているのを見た。

しばらくして、母が家の中に取り残されていることに気がついた。

「おかあさんを助けて。」

「助けてお願い。」

と、走り回っている大人たちに片っ端からしがみつき、声を限りに叫び続けた。だれにもその叫びは聞えなかった。声は届かなかった。迫ってくる火事に、母を助けられるのは自分しかいないと、哀しい決断を強いられた。

母を呼び続け、懸命に家具を押しつけ、がれきを放り投げ、一步一步母に近づいていった。やっとの思いで、母の手を捜し当てた。姿は見えなかった。母の手を見つけたとたん、その手を握り締めた。その時、少女の手は血まみれになっていることに気がついた。

「おかあさん、おかあさん。」

「おかあさん。」

手を握り締め、泣きながら叫び続けるだけであった。

火事は間近に迫っていた。火事の音が聞こえ、熱くなってきた。母は懸命に語りかけたが、かばそい声で少女には聞えなかった。

「おかあさん、おかあさん。」

と、叫び続ける少女に、名前を呼ぶ母の声がようやく聞えた。

「ありがとう。もう逃げなさい。」

と、母は握っていた手を放した。

熱かった。怖かった。夢中で逃げた。すぐに、母を抱え込んだまま、わが家が燃えだした。立ち尽くし、燃え盛るわが家をいつまでも見続けた。声も出なかった。涙も出なかった。

翌日、何をしたか、どこにいたか、覚えていない。

翌々日、少女は一人で母を探し求めた。そして見つけた。

少女は、いま一人で、見つけた母を「ナベ」に入れ、守り続けている。

語り続ける少女の目から、いつのまにか涙が消えていた。ただ聞くだけの私は、声も出さず涙だけがあふれ続けた。母と二人、この少女がどんな生活をしてきたのか、私は知らない。一人になったこの少女に、どんな生活が待っているのか、私にはわからない。

「この少女に神の加護がありますように。」生まれ初めて「神」に祈った。この少女に、なぐさめの言葉も、激励の言葉も何も言えなかった。何度も何度もうなずくだけで、少女の前を逃げた。

少女は、最後まで私の目を見続け、語り、そして語り終えた。その目は、もつと多くのことを私に語りかけ、今も語り続けている。

目は生きていた。

哀しいと思った。

美しいと思った。

強いと思った。

少女の名前を聞くのさえ忘れていた。

(警察官の手記)

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。

【人物探訪】鈴木重胤

学問への姿勢

まだ「お国自慢」などをした経験はないだろうが、これから先、いずれ県外の多くの人と知り合いになり、あなたも兵庫県について語る年ごろになる。そんな時あなたは、どう兵庫県を語るだろうか。

県外の人に兵庫の印象を訪ねると「スポーツが盛ん」だと言う人が多い。中学校、高等学校とも各種目に強く、兵庫県出身の実力者が競技スポーツ各分野に多いと言う。確かに、それも言えるだろう。

さらに加えるとしたら、県人の先達に「学問好き」が多いことを誇りたい。もちろん各地にそれぞれ学問で名をかせた人はいるだろうが、そうだとすると、兵庫県の先達には、自慢できる人がたくさんいる。

この本で紹介されている下中弥三郎さんは百科事典の生みの親だ。柳田國男さんといえば日本の民俗学の開祖であり、和辻哲郎さんは我が国の倫理学の基礎を築いた。このほかにも、三島徳七さんは「MK鋼」という今も生活に役立つている磁石を発明している。幕末の先駆者川本幸民は西洋の化学を研究し、明治初期の日本の文明の発達をけん引した。

兵庫県が生んだこのような識者は挙げればきりがなが、ここで「学問好き」ということで紹介したい人物が、一人いる。

鈴木重胤。淡路島津名（現在の淡路市）の出身。幕末の国学者である。

* 「国学」とは、日本の古典を研究し、仏教や儒教が渡来してくる以前の日本

固有の精神を明らかにしようとする学問のことで、江戸時代中期におこり、蘭学と並んで当時を代表する学問の一つだった。鈴木重胤はこの国学を研究した学者の一人で「日本書記伝」（未完）を著した。

日本は中国の影響を受け、古くから律令制度が国家体制の基本になってきた。律令とは法に基づく制度で、儒教の思想がその背景にあつた。国学はその思想に対して、日本古来の精神的な良さを生かそうという考え方から生まれた。国学者に賀茂真淵という人がいるが、真淵は「万葉集」にこそ古い時代の日本人の精神が含まれていると考え、その研究に生涯をささげた。

* 重胤は庄屋の息子である。当時、淡路の庄屋では国学が盛んで、島内の各

村の歴史を調べて本に残すような者もいるほどだった。重胤の父も例外ではなく、古典の研究に時を忘れて打ち込むような人だったといわれる。息子の重胤はその影響を受け、幼いころから知らず知らず学問の道に入り込んでいった。

しかし、重胤が十四歳の時、父が亡くなってしまう。大黒柱を失った鈴木家は生活に苦しむようになり、家計を助けるために重胤は大坂（現在の大阪）の鴻池家に商業見習いとして奉公に出た。

*

学問好きの重胤にとっては辛い決断だったが、むしろこのことが幸いした。もともと賢かった重胤は仕事をすぐ覚え、効率よく働いた。

当時鴻池といえば大商店で、国学、和歌、俳諧、茶の湯、生け花、囲碁に至るまであらゆる道の文化人が出入りしていた。重胤の向上心は、この人たちと接触することでますます高まった。

和歌に興味のある重胤が、ある時和歌の師匠が主人と話をするのを障子の

陰で聞いていた。それを知った主人は感心し、重胤をその師匠に引き合わせたという。重胤は和歌の道で才能を発揮し、三十歳になるころには、師匠と呼ばれるほどに腕を磨いた。

*

重胤の「国学」との出会い、出雲の国学者岡部東平の書物を読んでからであった。彼は東平師に会って議論に臨んだが、そこでまったく齒が立たない己を知る。もつと広い分野を深く研究しなければならぬと、研さんを積む日々を過ごした。そして再び東平師と議論に及んだ。しかし結果は無残なものだった。

落胆する彼に故郷淡路の母から「一度で東平師に及んでいたら慢心していただろう。及ばぬことがよかつたのだ。学問は一生かかっても十分になることはない」と便りがあった。ここで我に返った重胤は、が然勇気を出し学問に打ち込んだ。

一年が経ち、すでに出雲に戻っていた東平師を訪ね、重胤は三たび議論に及んだ。東平師は重胤の学問の成果に

驚いたという。感服した東平師は、重胤に「自分の息子を学僕にしてほしい」と申し出たという。
これを契機に重胤はますます研究に打ち込み、後世に名を残す国学者とし

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ての道歩んだ。

明珍火箸

コンコンコンコンコンコンコンコン……
同じリズムで鉄を打つ音がする。

火をたく仕事場は熱い。腰を屈め、何回も何回も繰り返し鉄を鍛える人がいる。
八百年続く明珍家五十二代の明珍宗理氏である。

皆さんは、明珍火箸をご存じだろうか。

世界にその名を知られる、姫路の代表的な伝統工芸品である。

志賀直哉は「暗夜行路」で「鈴虫の鳴くような音の出る火箸」と、その作中に取り上げている。一
対の火箸が触れる時、なんともいえない、よい音を発する。

左手にやつとこを持ち、真つ赤に燃える鉄を握る。そして、右手の槌でたたく。

一本の火箸を鍛えるのに、何百回もそれを繰り返す。

昔のままの仕事場で、昔からの道具を使って、黙々と火箸を鍛える明珍さん。

明珍さんの槌を持つ右手を見せてもらった。

分厚く、年季の入ったタコが岩のようだ。

「この手が、わしの人生をあらわしとくなあ……。」
と語る明珍さん。

不自然な姿勢での作業は腰に大きな負担がかかる。

「腰痛は、手仕事でもものづくりする職人特有のものでしょうなあ。機械で鍛えたのでは、この音は出せませんからねえ。」

八百年変わらない方法で鉄を鍛える明珍さんに、鉄を打つとき、何を考えているのかたずねた。

「ただひたすらに鉄に向かうだけ。何も考えない。」
そして、

「欲を出したら、いいものはつくれない。」
という答えが返ってきた。

七十歳を迎えた今も、一職人として、朝六時半から、火づくりし、そして鉄を打つ。

昼食の後、少し昼寝をして身体を休める。この休息がなければ過酷な作業に耐えられない。そしてまた、夜まで鉄に向かう。この生活を繰り返し返している。

「悪いものは皆、汗に出る。」

熱い仕事場で、毎日焼けた鉄と向かい合っている明珍さんは、汗にまみれている。

戦乱の時代、よろいやかぶとをつくる甲ちゆう師として明珍家の歴史は始まる。戦国時代はその需要は当然ながら多かった。しかし、江戸時代、泰平の世になるとよろいやかぶとの必要性は減った。もともと前橋に仕事場があったが、十八世紀に酒井家とともに姫路に移る。以後酒井家に仕え、姫路の地で伝統は継承されていく。

明珍家は甲ちゆうをつくる技をのこすために、つくるものを火箸にかえた。よろいやかぶとをつくった伝統の鉄の鍛練法が、鈴虫の鳴き声のような音を出す火箸を生んだのである。

しかし、その火箸も、明珍さんが言う「燃料革命」によって使い道がなくなり、いよいよ明珍家は窮地に陥る。

明珍さんは、子供のころに、生まれ育った家が人手に渡る経験をし、苦しい生活を余儀なくされた。そのような状況でも、「明珍家の鉄を鍛える技を残していかなければならない」「いいものをつくっていきたい」という使命感に裏打ちされた強い思いがあった。世の中には、世襲は気楽だと考える人がいるが、こと技術の伝承に関してはそれは的外れだ。

明珍さんの姿を見ていると、伝統を受け継いでいくことは決して楽なことではないということがわかる。

「この家に生まれたことも、背負った苦労も、皆、必然のこと。」

そう考えて宿命を受け入れた明珍さんは、伝統の技法を絶やさないための工夫をする。火箸を四本組み合わせた風鈴を考案し、その美しい音色が世界を魅了した。

近年では、古鉄を使った古代花器セットやチタン製の鈴、創作楽器「明潤琴」を発売している。それらの新しい作品も、この五十度を超える熱さの、昔ながらの仕事場から生まれる。

明珍さんは今日もまた、鉄と向かい合う。

コンコンコンコンコンコンコン……

それは八百年の間響き続けた、単調だが奥深い伝統の槌音である。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

いもうと 和辻哲郎

日本を代表する倫理学者和辻哲郎は、一八八九（明治二十二）年、神崎郡砥堀村（現在の姫路市仁豊野）に生まれた。和辻は仁豊野の尋常小学校を卒業し、加古川の鶴林寺の境内にあった高等小学校に入学するために、父の妹の嫁ぎ先である叔父井上政次郎の家へ預けられる。和辻はすぐに新しい生活に慣れた。この話はそのころのことである。

* * *

「ガラツ。」

教室の戸が開いた。みんなが一斉にそちらを見た。先生がげんな顔をして戸口に近寄った。戸を開けた職員が先生にささやいた。その時、哲郎の耳に「和辻……」という名前が聞えて、はっとした。

先生が、

「和辻くん。」

と言って手招きした。哲郎は、慌てて先生のそばに寄ると、

「何か急用でうちから迎えが来ている。急いで帰りなさい。」

と、言われた。走って井上の家に帰ると、捨さんが家の前に立っていた。

「捨さん。何があった。」

哲郎は、息を切らせながら聞いた。

「哲郎さん。お兄さんが重体で、すぐに会いに帰って来いということです。」

哲郎は、頭が真っ白になって何も考えられない。

哲郎は身支度をしてすぐに捨さんと井上の家を発った。加古川の町へ向かう途中、哲郎は捨さんに兄の病気の様子を尋ねた。しかし、捨さんはあまり詳しいことを聞いてはいないようだ。

哲郎は、捨さんと並んで田の中の細い道を駆へと急いだ。黙っているとな、哲郎の胸にだんだんと不安のかたまりがこみ上げてくる。兄さんは死ぬのだろうか。もうだめだから、こうして捨さんが迎えに来ているのではないだろうか。

「捨さん、家を何時ごろ出たの。」

「八時ちよつと前の汽車に乗ってきた。」

「じゃあ、もう三時間も前なんだ。」

哲郎は、あるいはすでに兄は死んでいるのではないかという恐ろしい思いに襲われた。

突然、「死」というものが哲郎の前に現れてきた。

哲郎は、兄の姿を思い浮かべた。兄は六歳年上であつた。哲郎が幼いころ、兄がねんねこ半纏でおぶつて裏口から家の外へ出て、村の西側を流れている小川沿いに田のあぜ道をしばらくの間歩き回つてくれたことがある。あの時は自分が病気でしばらく寝ていた時のことであつたように思う。

兄が小学校に行くのに、くつついて村はずれまで行ったこともある。

読み物のおもしろさを教えてくれたのも兄であつた。わからないことがあれば兄に聞きに行った。兄がいることの安心感、兄を頼りにする習性が、物心ついたころからずっと自分にあつたことに気づいた。そのかけがえのない兄を奪い去られるという悪夢に押さえつけられながら、加古川から乗つた汽車に揺られていた。

あえぐような気持ちで家に入ったが、幸い、兄の病気は大事に至らず、峠を越えていた。

仁豊野の家に一晚泊まつて、翌日加古川へ戻ることにした。その折、四歳になる妹のかが、二カ月ばかり離れていた間に見忘れたらしく、恥ずかしがって哲郎のそばに近寄らないのが何となくもの悲しい気持ちになった。

「かの。」

呼びかけても、妹ははにかんで逃げ回った。加古川に帰る時、兄のことよりむしろ、この妹のことが心残りに感じた。

それから、1カ月ほどして夏休みになり、哲郎は、妹と遊ぶことを楽しみに思いながら仁豊野に帰った。ところが、その妹が病気で寝ており、病状はよくなかった。

数日後、近くの村へ使いを頼まれた哲郎は、川原を歩いている時、そばにカラスが舞い降りてえさをあさっているのを見た。それを見ているうちに、兄の時と同じように、妹が「死」に奪い去られるのではないかという不安に包まれた。哲郎はふいに小石を拾った。この石をカラスに当てることのできれば、妹の病気は必ず治るといふ考えが浮かんだ。哲郎は、カラスをめがけて小石を投げた。当たりそうになるが、カラスはひよいと飛び立ってすぐ近くに降りる。哲郎は、また小石を拾って投げた。当たらない。哲郎は、また投げた。

「石が当たらなければ、かの死ぬ。」

その恐怖を振り払おうと、哲郎は夢中になって石を投げ続けた。しかし、カラスは前よりも遠のき、やがて飛び去っていった。哲郎は石をつかんだまま立ちすくんだ。

使いも忘れ、哲郎はうなだれて家に戻った。その哲郎に父が言った。

「かのが死にかけとるぞ。」

哲郎は川原の占いが的中したことに仰天した。急いで妹の寝ている部屋に行った。まくら元で、「かの、かの。」と、呼んでみたが、通じているのかどうかわからなかった。

哲郎はだんだん息を引き取っていく妹を見守るしかなかった。

哲郎は、隣の部屋へ駆け込んで大声を上げて泣いた。涙があふれるように流れ出た。どれくらい泣き続けたのか、ふと自分の泣き声に気づいた。哲郎は、泣くことが悲しさを洗い流していくのだこの時感じた。

* * *

「和辻の倫理学」は、中学生の皆さんには難しいかも知れません。

しかし、一昔前は、大学生になれば、和辻哲郎の「人間の学としての倫理学」、西田幾太郎の「善の研究」、阿部次郎の「三太郎の日記」の三冊が、必読の書でした。和辻の倫理学はそれほど読まれたのです。

このほかに、一般の人々にも広く読まれたのは、和辻の「古寺巡礼」と「風土」です。いつか皆さんも、郷土の偉大な哲学者、和辻哲郎の著書をひもといいてみる機会があるとよいですね。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。

絶対に、こんなことで死んでたまるか

たった二十秒の間で、神戸の町がなくなってしまった。自然の力の恐ろしさが、神戸市民そして世界中の人々に分かったと思う。その二十秒の地震のあと、僕たち一家四人が、崩れた家の中で五時間埋まっていた。三十センチの空間の中で声を出し合い、外の人の足音を聞けば、自分たちが埋まっていることを知らせた。外を通る人たちも、自分たちが逃げるのと恐怖で分かってくれない。十分、二十分、三十分、時がすぎる。かべのにおい、暗い中、口の中は土でつばも出なかった。母の大きな声が聞こえる。

「大丈夫、がんばろう。」

父は落ち着いていた。兄は父に、

「助かったら冷たいビールを思いっきり飲もう。おやじ、死ぬなよ！」

「おかん、がんばれ。良介もがんばれ。」

兄の力強い声は、僕に勇気を与えてくれた。

二時間ぐらい時間がたった。足の先から冷たくなり、頭の中が白くなってきた。それから数分たった。外の人が僕たちの声にやっと気づいてくれた。

「だいじょうぶか！」

兄が、

「僕たち四人がいます。助けてください。お願いします。」

「分かった！人を集めてくるから、もうすこしの間、がんばって！」

それから二十分おきくらいに声をかけてくれた。その時に父が、
「これから時間が長い、もう声を出さな、体力をたもて。」

今までで一番静かで冷静だった父が、力強い声で僕たちをばげましてくれただ。

三時間がたった。父と母は、口に出さなかつたけど、僕は火事になったらどうしようと考えた。足から火がきたら、熱いし苦しいだろうなと不安だった。

僕は百七十五センチ九十キロの体で、三十センチの空間はとても苦しかった。でも僕は、自分の心の中で、「絶対に、こんなことで死んでたまるか。」と自分の心に誓った。

それから近所のパン屋のお兄さんが、六人ぐらい若い人たちを連れてきてくれた。がれき、トタンや大きな柱などをどけて、ちよつと家の中に入ってきてくれていた間も、ずっと僕たち家族に声をかけてくれた。自分たちの家のこともあるのに、僕たちのために何時間もかけて救助してくれた。

母が、小さな声で、

「ありがとう。」

と、つぶやいていた。

生活の中で、いろいろ便利な機械やコンピュータなどがあるけど、人が人のことを思う気持ちが、何よりも一番大切なことが、この大震災のおかげでわかった。

父と母が大切にしていた祖父の写真が、兄のそばに落ちていた。そして、埋もれて五時間ぐらいたつて、とうとう兄が救出された。祖父が兄を守ってくれたと思った。あれほど、

「オレが助かったら、良介を出したるからな。」

と言っていた兄が、ぼうぜんとしていた。それから、父が助かり、母が助かって、僕も外に出られた。真っ暗の中で、砂とほこりの中にいたので、外のあかりを見たときと、空気を思いつきり吸えたときの感動は、だれにも分らないと思う。

僕たちを助けてくれた人たちは、僕たちが、「ありがとう。」の一言も言っていないうちに、私たちの家のことで、もういなくなかった。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使
用することを禁止します。

伝統をつむぐ 赤穂緞通織り

それは中国の荘厳な毛織物のようでもあり、ペルシアの市場を舞う不思議なじゆうたんのようでもあった。独特の文様の織物。よく見ると、その文様を際立たせるためか、表面が念入りに摘み込まれて仕上がっている。

赤穂で伝えられているこの織物は、「緞通」という一般には聞きなれない工芸品だ。

江戸時代末、児島なかという赤穂の女性が中国緞通の美しさに魅せられて作ったのが始まりだといわれる。もちろん作り方を教えてくれる人はいない。彼女は端布をほぐし、織り方も、道具も独自に工夫した。そしてできた座布団程度の大きさのものが、赤穂緞通の原点だった。

その後、試行錯誤を繰り返して、ようやく二十六年後に、児島なかの緞通の美しさへの追求と努力が実り、商品として売り出すことができるようになった。当時、赤穂の産業の中心だった塩田で働く多くの女性の副業として、緞通織りは生活を支える糧にもなった。時代は明治に移

り、緞通はますます盛んになり、品質も驚くほどに向上した。

明治時代の末期から大正時代にかけては、海外へも輸出され、赤穂の誇るべき工芸品として最盛期を迎えた。京都八坂神社の祇園祭では、山鉾の屏風飾りにも使われた。このように、赤穂緞通は立派な工芸品として、世の中に広く認知されていった。

しかしその後の不況や戦争、そして戦後の綿糸事情の悪化に加え、機械生産技術の発達など、緞通織りをとりまく環境は厳しくなっていた。手間のかかる手作業が赤穂緞通の特徴ではあったが、その効率の悪さもあり、次第に織る女性が減っていく。緞通織りは衰退し、昭和の時代から平成の世になるころには、地元赤穂でも知る人が少なくなっていた。だれも顧みることがなかつ

たら、おそらく赤穂綴通織りの技術は、いずれ永遠に途絶える運命だったろう。

パチ、パチ、パチ。

織物の表面にはさみを入れていくと、鮮やかに文様が浮かび上がってくる。

「これが赤穂の綴通……。」

井関京子さんは思わず息をのんだ。

赤穂綴通の最後の織り手といわれる阪口キリエさんのことを偶然知り、一九九〇（平成二）年にその小さな作業所を初めて訪れた時のことだ。

その時、阪口さんは言った。

「伝統技術を持つ一人といっても、いつの間にか私一人になってしまった感じです。一年に一枚でも、と頼まれて織っているうちに、ここまで来たように思います。」

井関さんは、「こんな美しいものを織ってみたい」という気持ち湧き上がってきた。

翌年、郷土の工芸品が消えていくことを憂えた赤穂市教育委員会が「綴通織りを過去のもの

にしてはいけない」と阪口さんを講師に迎えて講習会を企画し、参加者を募集した。

驚くことに百五十名を超える応募者があり、その後抽選で受講生を二十二人に絞った。その中に井関さんもいた。

その講習会は週に一回、年間五十回。そのうち四十八回以上の出席を要するという厳しいものであった。

講習会は水曜コース、土曜コースの二コースに分かれて行われた。

「私が織るので見ていてください。」

井関さんたち受講生は、交代で、阪口さんの手元を食い入るように見つめた。

織機に張った縦糸に横糸を通し、さらに文様に合わせた色糸を縦糸に結びつけていく。一日わずか二、三センチほどしか織れないという気の遠くなるような作業だ。

「さあ、皆さんやってみましょう。」

阪口さんは、はりのある声で受講生を促した。講習が始まった時、織機は一台しかなかった。受講生は二人一組になり、一台の織機を交代しながら織っていく。井関さんは必死で阪口さん

の織り方を見たつもりだったが、うまくいかなかった。
受講生が少し織ると、阪口さんがはさみで仕上げをする。その手元を一生懸命に見る。そしてまた織る。そんな繰り返しで一年半続いた。そして、ようやく「摘む」段階に進んだのだった。

作業工程のうちで、最も難しいのが「摘む」という作業だ。握りばさみで絵図柄を刈り、表面をならしていく。はさみを入れるのは勇気がいる。

最初は手が震えた。

「パチツ。」
と、音がするたびにドキンとした。どの作業よりも気持ちを集ませせてやったのになかなか表面がそろわない。

受講生たちは、

「これぐらいでいいのかしら。」

「いや、もう少し摘むほうが……。」

と、互いに励まし合いながらはさみを動かしたが、なかなかきれいに摘むことができない。受講生の摘んだ不ぞろいものを前にして、
「では、仕上げを試してみましようか。」

阪口さんは、握りばさみですばやく摘んでいく。そして、見事な出来栄えに仕上げていく。受講生にはその作業を見せるだけで、言葉で教えることはほとんどない。

井関さんは、阪口さんの仕上げを見るたびに、「まだまだだなあ。自分でもこんなところまで、できるようになるのかしら……。」

ある時、阪口さんは仕上げのはさみを入れながら、優しいながらも力強い口調で言った。

「緞通の技術は、こうしなさい、あしなさいと教えるものではないんです。体で覚えていくものなのです。私ができるのは後押しするだけです。大事なことは、その人がどれだけ時間をかけて打ち込んだかということですよ。」

井関さんは、自分に向かって言われたような気がした。

畳一畳の赤穂緞通を織り上げるのに一年はかかるという。その緞通を毎日毎日何十年と織り続ける阪口さんの言葉は、井関さんの胸にずしんと響いた。井関さんは、そつと阪口さんの顔を見た。穏やかな表情の中にも、緞通場をやめ

て講習に専念し、後継者を育てようとする阪口さんの意志が感じられる。

井関さんは改めてはさみを握り直し、一心に緞通に向き合った。

二年目に織機は三台、三年目には四台となり、受講生たちが織機に触れる時間はぐんと増えた。

やがて、少し織れるようになった受講生たちは、

「どうすればもつときれいな緞通が織れるようになるかしら。」

と、楽しみに話をするようになった。

そして、そのころから、だれが言うともなく、
「でも、これを伝えていかななくてはね。」

というような話がたびたび出るようになった。

一九九六（平成八）年、井関さんたち一期生は長い五年間の講習を終えた。

「私たちが続けなくては。講習を受けたんだから。」

一期生たちの赤穂緞通織り伝承への熱い思いは、ますます高まっていた。

一九九六（平成十）年、一・二期生を中心とした二十数人が「赤穂緞通を伝承する会」を結成した。

まず、機織り場の確保や織機・握りばさみなどの道具をそろえた。さらに市内の家庭を回つて古い作品を見せてもらい、方眼紙に色を塗つて、絵柄やデザインを図面にした。そして難しいとされるはさみでの「摘み」の技術の向上に積極的に取り組んだ。

やがて十年近くがたち、三期生も講習を終えた。しかし、なかなか次の担い手が広がっていない。

そんな時、井関さんは阪口さんが話してくれた言葉を思い出す。

「赤穂の緞通がほしい、赤穂の緞通でないと、
と言つてくださる方がいる限り、やはり少しづつでも織つていかないと。」

さらに、阪口さんは言っていた。

「練習用に織るものではないですよ。機に向かう時はいつも本番。売り物だという気持ちで織れば心のもち方も違ってくるものです。」
阪口さんの言葉を思い出していると、井関さんは心の中の焦りが静まるのだった。

阪口さんが言った忘れられない言葉がある。
「あと、もう一枚、はいで。」
あの時はわからなかった。いつしか十年以上織るようになった、やっとわかるような気がしている井関さんだった。
型通りのものをつくっているのに、織り手一人一人の個性が出る。それが手作りの良さかも知れない。手間がかかり、簡単には仕上がらない赤穂緞通。だからこそ人の心をとらえることができるのだと、井関さんたちは信じている。

ガタン、ガタン。パチ、パチ、パチ。
今日も機織りとはさみで刈り込む音が工房から響いてくる。
「赤穂緞通を伝承する会」は、伝統工芸の保存や技術の伝承ばかりでなく、地場産業としての復活に向けても動き始めた。
赤穂緞通は、もともと女性の副業として発展してきた工芸品だった。「伝統」であると同時に「産業」として継承されてきたものである。
観光で訪れた人の見学や体験を受け入れるほか、さまざまな展示会にも出品し、販売も行っている。

赤穂市では、「赤穂緞通を伝承する会」以外にも多くのグループが活動し、それぞれが引き継いだ技術の完成度をより高め、赤穂の地に伝えていこうと、日々機に向かっている。
その技術が永遠に途絶える危機を救った人たちがいる。
熱意ある人たちの取り組みは、今も続く。

事典をつくった人 下中弥三郎

これから先、何十年かの時が流れ、あなたがお母さん、お父さんになつているとしましょう。

なかなか机に向かわない小学三年生か四年生になる娘または息子がいたら、あなたもそう言われたように、「勉強しなさい！」とか「宿題したの？」としからずにはいられなくなる。

すると、あなたの子供は

「なんで勉強せなあかんの？」と、開き直る。

そうきたら、こう言つてあげるとよいでしょう。

「それは、自分の知らないことを発見するためにだよ。」と。

そして、我が子がもう少し大きくなつて、今のあなたくらいに成長したら、この物語の主人公、下中弥三郎という人のお話をしてあげてください。

種明かしをしてみようと、下中弥三郎さんは日本で初めて百科事典をつくった人です。

「事典」という言葉も彼の造語だと伝えられています。当時「辞典」という言葉はありましたが、「事典」という言葉のもつ意味深さは、弥三郎さんの知識に対するこだわりを知るにつれてわかつてくるかもしれません。

弥三郎さんは、子供のころは家庭が貧しく、学校にも行けない状況でした。にもかかわらず、自分の知らないことを発見することに無上の喜びを感じながら、勉強を続けました。

これは日本の出版界、いや、社会の歴史に残る百科事典を発刊したその弥三郎さんのお話です。

弥三郎は一八七八（明治十一）年、丹波焼で有名な篠山に窯元の長男として生まれました。下中家では跡取りが生まれたと、皆で大喜びしたそうです。ところが、弥三郎が数えの三歳の時に、父が亡くなってしまふのです。父あつての窯元でしたから、下中家の家計は当然厳しくなりました。極貧の暮らしは、子供の弥三郎に大きな影響を与えます。後年、弥三郎は、からだをくの字に曲げて日暮れまで田んぼで働く母の姿が心に焼き付いていて、言っています。収穫したわずかな米も借金の子に取られる始末で、育ち盛りの弥三郎は、いつも空腹と闘っていました。近所の家から漂ってくるゆうげのにおいに、胃袋がゴォーと滝のような音をたてることがよくありました。学校へ弁当を持っていくことができず、昼食時には家に帰ってきて、リョウブという木の葉にわずかな米を混ぜ、お茶でそれを流し込み、急いで学校へ戻るので、学校まで駆ける弥三郎の腹から、チャッポン、チャッポンと音がしたといひますから、お昼ご飯はほとんど水分だったのでしょう。

どれほど貧しくても、空腹であつても、弥三郎は学校を休むことはありませんでした。毎日、先生が教えてくれることを目を輝かせて聞き、新しい知識に出会う喜びを感じていました。

しかし、家の事情はいよいよ弥三郎を学校に通わせられないほどに切迫します。十一歳の時、家計を助けるために学校をやめなければならなくなりました。弥三郎は窯元で手伝いを始めました。

小さい体で重い土を背負つて峠を何べんも越えるのです。土の重さによるめいては立ち止まり、歩いては倒れ、倒れては立ち上がり、そうして弥三郎は懸命に働きました。鬼のような形相で、弥三郎は必死に踏ん張りました。その姿に母は、勉強好きの息子が学校へ通えないことを不びんに思い、

「すまんな、こらえてや。」

と涙を流すのでした。母にそう泣かれると弥三郎は、

「かあちゃん、気にせんでええ。僕には、この本がある。」

と、分厚い本を指さしました。

その本は、近所に住む医師の中井先生が、「おまえの学問好きは感心や」と言って、譲ってくれたものでした。百科全書と違って当時の西洋の知識が詰め込まれた書物でした。中井先生は、「自ら知りたいと思うことを追い求めるのが本当の学問だ」と弥三郎に諭しました。そして学問することによって「見えんものが、見えるようになってくるんじゃない」とも言いました。

弥三郎は、学校へ行くことができなくなっても、その百科全書を毎日、毎日読み、多くのことを学んでいっては、新しい知識を身につけることの喜びを感じていたのでした。その様子に母は、「お前は、腹が減ったら、茶わんに字を入れて食べたらいいほど、本好きやな」と言ったそうです。

後年、弥三郎は「激しい労働に服しながらも夜学などして一日たりとも研学の志は捨てなかつた」と、このころのことを回顧しています。

篠山には鳳鳴義塾という学校がありました。そこは裕福な家庭の子供しか学ばせませんでした。

弥三郎の学問好きの評判を聞いた村の指導者である大西寛之助という人が、差し向かいで弥三郎を教育してくれました。弥三郎はそこでも熱心に学びました。

二十一歳になった弥三郎は、神戸へ出て小学校の代用教員の職を得ました。そして独学して小学校の教員免許をとります。勤めた小学校は大きくて、図書館に豊富な書籍があるのが弥三郎には魅力でした。だれもが嫌がる宿直をわざわざ引き受けて、片っ端から図書館の本を読んでいったそうです。自分の知らないことを発見する毎日が続きました。

やがて弥三郎は、帝国図書館があるという東京にあこがれをもちます。神戸では、小学校で教え、自らは書物で学び、そして研究し、「小学校における国語及びその教授法」という本を自費で出版しました。後に「出版は教育なり」と、出版社を設立する弥三郎の、それは第一歩でした。

弥三郎があこがれの帝国図書館のある東京に出たのは二十四歳の時でした。夜学の学校に入りましたが、二年の課程を待たず、半年で辞めました。先生の講義を聴くより、自ら進んで図書館で研究する方が性に合っていたようです。東京での弥三郎は、あらゆる分野に興味をもち、本人は「学問上の一浮浪人」だったと当時の自分を表現しています。

一九〇五（明治三十八）年に、日本女子美術学校の教師となった弥三郎は、今まで中心に研究してきた国文学だけでなく、哲学、宗教、社会科学、教育学、文学、美術などに捨て難い面白みを感じます。三十歳になっても、多方面へ知的な関心を向けていきました。

一九一〇（明治四十三）年、中等教員検定試験に合格した弥三郎は、埼玉県師範学校に奉職しました。倫理学などの講義を受け持ちましたが、学生に教えるだけでなく、ここでも学校にある図書館の豊富な蔵書の恩恵を受け、弥三郎は自ら多くのことを学んだのです。

安定した収入も得られるようになり、結婚もして、家も得た弥三郎の生活は落ち着いてきました。しかし、なぜか弥三郎は、この生き方に物足りなさを感じるのでした。

これまで弥三郎は辞典や字典などを読破してきました。これらが独学者の知見を広めるのに、どれほど役立つたかしのれないと、弥三郎はある講演で回顧しています。

「しかし、辞書のたぐいは使い慣れると、何か物足りない。」

弥三郎は、いつたい何が物足りないかを考えてみました。まず、「意味がわかる」とこと「知る」ということは、大きな違いがあると感じました。「意味がわかることは『知る』ことのスタートラインに立ったにすぎない。だから自分が求めるような深い内容に 대응することができないのだ」と思いました。さらに、「言葉の意味を相手にするだけではやはり十分ではない」と思うのでした。「言葉というより事柄を、しかも世界のあらゆる事柄を知ることのできるような書物が欲しいものだ」と強く思うようになったのです。

弥三郎は、「僕には、この本がある」と、百科全書をむさぼり読んでいた子供のころを思い出していました。あのような本があれば、たとえば自分のように貧しく、学校へ行けない人たちでも知識を得ることができる。弥三郎はそう考え、日ごろから原稿を書きためていきました。

そして、いよいよ一九一四（大正三）年、「や、此は便利だ」という新語辞典のある出版社から発刊したのです。ところが、その会社は資金繰りがうまくいかず、すぐに倒産してしまいます。弥三郎はこの本を自ら出版しなくてはならなくなりました。

これが、彼が創業した平凡社の始まりです。

「や、此は便利だ」は平凡社が通信販売をしてみると、よく売れました。弥三郎は、世の中の人々が、知識を求めていることを実感し、人々の知りたい、学びたいという意欲に応える、さらに立派な本をつくりたいと考えました。

弥三郎は、理想の本を具体的な形に企画してみました。それは壮大なスケールで、世界のありとあらゆる事象をまとめて説明するというものでした。一九二九（昭和四）年から編集に着手し、これまでに知り合った多くの識者の協力を得て、一九三一（昭和六）年に「大百科事典」の第一巻が発刊されたのです。

「平凡社は名前は平凡だが、やることは非凡だ」と賞賛されました。

「よし。これで、多くの人とわからないことを知る喜びを分かち合うことができる。」

ずしりと重い大百科事典を手にし、大きくうなずく弥三郎でした。

それから三年後、全二十八巻が発刊され、編集は完結しました。

二十八巻が完結した直後、時代の流れや変化の中で、改訂しなければならぬ項目があることをすでに弥三郎さんは指摘しています。言葉ではなく「事柄」を追い求めれば新しいことに会えるのは当然のことでした。自分の知らないことの発見に、弥三郎さんはどこまでもどん欲でした。

「大百科事典」はその後「世界大百科事典」となり、今日も発刊が続いています。今もなお、多くの人の知識の宝庫となっています。

今では調べものはインターネットや電子辞書で事足りてしまう時代ですが、それでも人間から、何かを知りたい、という欲求が消え失せることなどありません。もちろん「世界大百科事典」も電子化されて、多くの人に親しまれています。が、一度機会があったら、あの分厚い一冊を手にとってみてください。

ずしりとくるその本の重みは、生涯を通し自分の知らないことを発見しようとしてきた人、下中弥三郎さんが積み重ねてきた、知への探究心の重みそのものなのです。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

及川先生の背中

平治は冷たくなった父の傍らで、一人じつと座っていました。長く病にふしていた父が息を引き取ったのです。楽ではない暮らし向きでしたが、「学校へ行ってしつかり学べ。そして人の役に立つ人間になれ。」と、平治を学校に通わせてくれた父が、いましがた息を引き取ったのでした。

葬儀の片付けが終わった夜、平治は父の死から思案し続けた結論を母に告げました。

「母さん、ぼく明日から働くよ。」

母は瞳を潤ませしばらく平治を見つめていましたが、小さくうなずきました。

*
その当時の教育は森有礼によって一八八六（明治一九）年に公布された「小学校令」に基づいて行われていました。

「児童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年」の間、教育を受けることとされてきました。今の義務教育に当たりませんが、実態は名ばかりで、無償ではなく、貧しい家庭では子供を学校に通わせるのは大きな負担でした。

向上心の強かった平治も、父の死によってやむを得ず学校をやめ、働くことになったのです。しかし、平治は学ぶことをやめませんでした。独学して高等小学校卒業程度の学力をつけ、授業雇いという代用教員として、母校の教壇に立ちました。

*
及川平治。
彼は一八七五（明治八）年に宮城県で生まれました。いま述べたように苦学して代用教員になり、十八歳で師範学校に入学します。宮城、東京で小学

校の教員を務め、一九〇七（明治四十）年に兵庫県明石女子師範学校付属小学校に赴任しました。それから三十年間、一九三六（昭和十一）年に退職するまで、付属小学校で教師として働き続けました。

及川さんは苦学して教員になった自分の経験から、教師となつてからも、子供たちがわかる授業をするために、教育の方法について様々に試行錯誤を繰り返しました。

またその生い立ちも彼の教育に影響を与えています。こんなことがありました。教え子の中に、体が大きくなつても制服を新調できない子がいました、ある日、及川さんはその生徒の家へ行き、

「お母さん、これはあまりそでを通さずに転校して行った子から譲り受けた

制服です。お子さんにどうぞ。」と言
って包みを置いていきました。母親が
開けてみると、それは明らかに新品で
した。慌てて返そうと外へ出ると、先
生はもう遠くの角を曲がるところでし
た。母親は、まっすぐにピンと伸びた
及川先生の背中に深々と頭を下げまし
た。

及川さんが教師として活躍した大正
時代の教育は明治時代のものでした。
及川さんには、教育の方法がどうして
も形式的に感じられて仕方ありません。
当時、教育界では及川さんと同じよ
うな考えをもつ人々が多くいました。
画一的で型にはまった教育スタイルを
なんとかしようという運動が、折から
の大正デモクラシーの風につて全国
に広がっていました。

兵庫県で教師をしていた及川さんは
「分団式動的教育法」を提起し、全国
の教育に新風を吹き入れたのでした。
この教育方法は、子供の個性を大切に
し、子供の活動を重視した授業を実践

するといふもので、全国から多くの教
師が参観に訪れました。

一人一人の子供にあたたかく接する
及川さんの広い背中が、個性を生かす
教育の大切さを無言で伝えていたよう
でした。

現在の神戸大学付属明石小学校・付
属小学校の校長室に、

「新教育の幕を開かん 凡ての人のた
めに 凡ての子供等のために 私の凡
てを捨てて 及川平治」と
墨書された文字が額に入れられ、掲
げられています。

そこにはペスタロッチと共通する教
育者としての熱い思いが込められてい
ます。及川さんは、子供たちを教えな
がら、子供の視点で教育を組み立てよ
うとしました。

まだ中学生のあなたたちは、学ぶ側
の立場ですから、及川さんの話はいさ
さか退屈だったかもしれませぬね。

しかし、教育はあなた自身の宝にな
るものであり、社会の発展のためにも
欠かせないものなのです。

今日学ぶこと、知ること、身につけ
ること、それはあなた自身の未来の糧
になるでしょう。そしてそれは、いず
れ必ず世の中の役にも立つのです。

及川さんは、その教育の要である
「日々の授業」の改善に、自分のすべ

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止
します。

てをかけた人でした。

洋子の播州歌舞伎

伝統の若き後継者

「ねえ、ちよつと洋子！」

追いかけてきた美咲の声にはつとして、洋子はゆっくり振り向いた。

「もうすぐ定期演奏会よ。」

美咲が自転車置き場の通路で仁王立ちしていた。

「ごめん！ それはわかつてる。でも、今日のところは……。」

と、洋子は美咲に手を合わせた。

「ほんま……、しゃあないな。全体練習にはおつてほしいんやけどな。そつちもたいへんやろうけど……。」

吹奏楽部の部長の美咲にも、洋子の立場はよくわかっている。それだけに洋子は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

二足のわらじを履くと、こういう時に自分を追い詰めることになるかわかっていたつもりだったが、この状況は、やはり辛い。吹奏楽部員の一人である自分、播州歌舞伎クラブの一人である自分。分身したい気分だった。

「ほんま、ごめん。」

洋子は手を合わせ美咲に頭を下げ、自転車に飛び乗った。

公民館への道のり、洋子は複雑な思いだった。

「美咲、怒つとつたな。みんなに悪いなあ。やっぱり、二つのことを一緒にやるんは、無理なん

やるか？」

洋子は、もやもやした思いを断ち切ろうと、自転車のペダルを強く踏み込んだ。

公民館に着いた洋子は、けいこ場へ急いだ。「ふるさとフェスティバル」の公演に向けての播州歌舞伎「寿式三番叟」のけいこは熱を帯びていた。

「すみません、遅れました！」

そう言つて洋子は更衣室で運動着に着替え、けいこの輪に入った。

練習には、高校生や会社帰りの社会人などクラブの仲間が集まっている。今日も遠くから駆けつけた大学生の由香里もいた。洋子は由香里と目があった。由香里がにっこり笑つた。洋子はさっきのモヤモヤが吹き飛んでいくのを感じた。由香里は洋子の慕っている大好きな先輩なのである。

洋子が播州歌舞伎のクラブに入ったのは小学校四年生の時、「ふるさとフェスティバル」での公演を見たのがきっかけだった。地元の歌舞伎に感動した洋子は、同級生の綾子と一緒にクラブに入会した。その時、クラブには中学三年生だった由香里がいた。ちょうど今の洋子と同じ年だった。

綾子は中学校に進学しバスケットボール部に入った。両立は難しいと考え、すっぱり播州歌舞伎クラブをやめた。別に歌舞伎が嫌になつた訳ではなかったが、彼女なりに考えた末の決断だった。

洋子は吹奏楽部に入った。播州歌舞伎クラブの練習は週一回金曜日だけだから、なんとか両立できるだろうと考えていた。それに由香里先輩と別れるのがさみしくもあり、どうしても歌舞伎クラブをやめる気にはなれなかつたのである。

中学一年と二年の時も、定期演奏会とフェスティバルの公演の時期が重なった。しかし吹奏楽部には先輩たちがいたし、洋子の立場も気楽だった。みんなも歌舞伎の練習を優先させてくれた。だが今年には三年生。部活での自分の役割から考えると、全体練習にいないというのはまずかった。

「中の太夫！ 何やつとんねん！ 手首の動きが甘い！ 手の高さを合わさんかいな！ ほら、気持ち入れて、気持ち！」

中の太夫とは洋子のことである。師匠の和歌若先生からしつたの聲が飛んだ。洋子は我に返って、役を演じきるけいこに励んだ。

けいこが終わつたのは午後九時を少し回つたころだった。

「お疲れさんやね。洋子ちゃん、上手になつたやん。」

由香里が洋子に声を掛けてきた。先輩に褒められた洋子はうれしかった。

「いえ、全然です。でも先輩、大学へ入って住まいが遠くなつてしまつたのに、毎週毎週、大変でしょ。とくに公演前は毎日やし。」

洋子は由香里の気を引こうとして、そんなことを言つた。

「彼氏がない、そう言いたいんちゃう？」

由香里は笑つて応じた。

「いえ……、そんなつもりじゃ……。」

洋子は由香里切り返しにろうばいして顔をあかくした。

「じよだんや。わかつてるつて。私も大学に入って寮で一人暮らしするようになって、いつときやめようかと思つたんや。でもな、部員も十名ほどしかおらんやろ。それに、なにかやめきれん

でな。それで、続けることにしたのよ。」

洋子は黙って聞いていた。

「でもやめきれんかったわけがわかってきたのは最近やね。なんて言うのかな、元禄時代から伝えられている播州歌舞伎の重さというか、すばらしさっていうか、演じる楽しさっていうか、そんなもんを感じるようになったんよ。あつ、ここでやめたらあかん！　って感じたんよね。」

洋子は初めて播州歌舞伎を見た時の感動が、今はすっかり薄れて消えてしまっていることに気づいた。そして、自分はどうしてこのクラブをやめずに続けているのだろうと自問した。「惰性で続けているだけののだろうか……」答えは見つからなかった。

「先輩は中学三年生のころ、どんなこと考えながら歌舞伎をやっていたんですか？」
洋子は由香里に聞いた。

「どうやったろうな……。今日はこれができた、明日はあれができるようになりたいっていう気持ちでやってたかな。でも、歌舞伎のけいこはいつも楽しかったわ。」

由香里は更衣室へ行くこうと立ち上がった。洋子も一緒に立ち上がりながら、

「先輩がさつき言った、播州歌舞伎のすばらしさって何ですか？」

と、由香里に尋ねてみた。

「それは難しい質問やな。」

由香里は立ったまま笑って、ひと呼吸おいた。

「そうやね、それは自分が播州歌舞伎を演じる楽しさと、伝統芸能をつないでいるっていう心地よさというか、責任感というか……。まあ、自己満足なんやろうけど、そんなところやね。」

「伝統をつなぐ……。」

洋子は由香里が言った言葉を繰り返した。

そういうことを考えたことがなかった自分に気づき、更衣室に入っていく由香里の背中を見つめた。

次の日の朝、吹奏楽部の朝練習に参加するため、洋子はいつもよりずっと早く学校に行った。自転車置き場に、まさにヘルメットを取ろうとしている綾子がいた。洋子が声を掛けた。

「おはよ。引退したのに早いやん。」

「あら洋子、あんたも早いやんか。あつ、そうか、定演も近いしね。」

綾子は大きなバッグを肩にかけながら言った。綾子は単語を省略する特技がある。

「シユウタイでいいとこまでいつてんねん。二年生が、どうしても練習出てきてくれって言うし。このチクタイはどうしても優勝したいんやつて。でも、あんたはえらいな、歌舞伎も三年間続けたし。尊敬するわ。ふるフェスも近いんやろ？」

二人は歩きながら話した。

「ねえ、綾子、歌舞伎やめて、よかつた？」

「えっ？」

「今な、部活と歌舞伎の両方やってんのがよかつたんかどうか、わからんようになって……。」

「洋子、あかんよ、今になってそんなふうを考えるの。うちはもうバスケやるって決めた時、両立は無理やと思つたからやめたんやから。それに洋子は歌舞伎が大好きやんか。あんたがけいこしてる時の顔は生き生きしてるし、これは洋子にかなわんと、いつも思つとつたわ。」

「生き生きしている……」洋子は、綾子の目に自分がそんなふう映っていたことが意外だった。

「定演もふるフェスもがんばりや！」

そうやって、綾子は体育館へ向かって走っていった。

綾子と話した日から、洋子はけいこに取り組む自分が、今までとは違う自分であるように感じ始めていた。

由香里の言葉と綾子の言葉が、浮かんでは消え、消えては浮かんできた。しかしいつの間にか、それも忘れ、無心に演じていた。その時、

「おっ、だいぶええな、そこええぞ！」
と、和歌若師匠の声が掛かった。

師匠の声で我に返った洋子は、夢中になってけいこに打ち込んでいた自分に驚いた。

「ふるさとフェスティバル」のフィナーレを飾った公民館播州歌舞伎クラブの「寿式三番叟」は、部員たちの堂々とした演技で幕を閉じた。

たくさんの観客からの拍手が鳴りやまなかった。美咲も綾子も客席から拍手を送っていた。幕が下りた舞台で洋子は部員たちと成功を喜んだ。由香里と抱き合った。

「私、今、由香里さんが『伝統をつなぐ』と言った意味が本当にわかった。」

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。

地図をもたない旅人 湯川秀樹

「ユカワ相互作用」

「ユカワポテンシャル」

物理学者の用語で「ユカワ」と名づけられ、現在も使用されているものがある。

「ユカワ」とは、「中間子論」を発表し、一九四九（昭和二十四）年に日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹、その人である。

東京オリンピックのころ、小学生だった世代の多くの日本人にとっては、ノーベル賞といえば湯川秀樹さんであり、湯川さんといえば、ノーベル賞だった。

* * *

湯川秀樹は一九〇七（明治四十）年、小川家の三男として東京で生まれたが、一歳の時に京都に転居した。姓が小川から湯川になるのは、一九三二（昭和七）年に湯川スミと結婚し、湯川家の養子になつてからである。

湯川が、高等学校一年生の二学期のことである。数学試験の答案が戻された時、

「注意点を取ったものは、……小川、お前や。」
と先生に名指しされた。湯川は驚いた。答案用紙を見ると三問あるうちの一問の証明問題がペケになつていた。完べきな証明をしたつもりだった湯川は事情がわからなかったが、仲のよい友人が、

「あの先生は自分が講義中に板書した証明の通りやないと、点数くれへんのや。」

とささやいた。湯川は、このころから独創的な思考を得意としていたのだろう。おそらく証明の方法は、先生よりも高度な解法だったに違いない。

少年のころの湯川は、口数が少なく、そして頑固だったという。ただ数字が大好きで、難解な問題を解き明かすことが、楽しみだったようである。それも独自の方法を考案して解くことが無性に楽しかった。教科書だけでは飽き足らず、たくさん参考書や問題集を本屋で買い求め、数学を楽しむ日が続いた。

湯川の大学同期生に、年は一つ上だが同じく後にノーベル物理学賞を受賞する朝永振一郎がいる。朝永が「凡庸だがおもしろいアイデアの持ち主」と評するように、独特な発想力が湯川の持ち味だった。この時期の数学の思考法が湯川の独創的な才能を磨いたのだろう。

二年生になつて物理学の授業が始まった。湯川の興味はしだいに数学から物理に移り始めていった。英語で書かれている物理の教科書に示される難解な問題を解くことに、湯川はおもしろみを感じた。このころ、「量子論」の英訳本を読んだといわれ、「理論物理学は暗中模索の状態にある。これを解決する炎はまだ燃え上がっていない。これからの多大な努力が成功をもたらすことを期待する」というその本の最後の記述が湯川の心を大きく揺さぶった。

「物理学にはまだまだわからんことがぎょうさんある。よっしゃ、ぼくがそれを解いていつてやる。」

この時から、湯川の学問の道標が大きく理論物理学へと向き始めていった。

大学へ進み理論物理学を専攻した湯川は、卒業後も無給の副手として大学に残り研究を続けた。このころ、物質を構成する最小単位である原子のような極微の世界について説明できる新しい理論が発

見され、世界の物理学の研究者は活気づいていた。しかし、我が国の大学にはそういった世界の最先端の理論を教授する先生がいない。湯川は自分で学ぶしかないと思つたことだろう。世界を見渡すと、湯川とさほど年齢の違わない若い研究者が活躍している。負けるわけにはいかなかった。

頑固な湯川に「負けず嫌い」というもう一つの性質が、こと物理の研究において内面に芽生えてきた。世界の同世代の研究者に対する湯川の闘争心が燃え上がってきたのである。

大学を出て三年目、縁談がもち上がった。

結婚して間もないころ、理論物理学の研究者である湯川に、妻となつたスミが、

「学校でノーベル賞という賞があることを聞いたことがあります、あれは日本人にはいただけないと聞きました。本当なのでしょうか？」

と尋ねてきたそうだ。湯川は、

「いや、どこの国の人だつてもらえる。」

と笑つたが、すぐに真顔になつた。

時代は満州事変がぼつ発したころである。しだいに軍事色が強くなる社会情勢の中で、ノーベル賞の話題など、世間ではまず出なかつただろう。しかし、どのような状況であつても、科学の発展、進歩のために研究を続ける者がいるのである。自分もいつそう努力しなければならぬと誓つた湯川はスミに、

「これからぼくは世界中の物理学者のだれもが解けない難問に挑戦する。協力してくれるか。」
と照れながら言つたという。

しかし、それからしばらくの間、湯川はさえなかった。大阪の大学に移っていた湯川は、思い悩み、ふさぎ込んだ。世界の若い物理学者が原子核の構造を解明したり、中性子を発見したりしていたのだ。そういった情報は、負けず嫌いの湯川には相当なプレッシャーを与え、ストレスとなった。

スミは、湯川の焦燥を最小限にとどめようと、家庭において支え続けていた。そのころの住まいが、西宮市苦楽園にあった。湯川は部屋で物音を聞いたり、庭にだれかがいるように感じたり、戸締まりを気にしたり、神経がだいぶすり減っていた。

湯川は、原子核内の陽子と中性子を結び付けている力は何かを考えていた。湯川は、考えた理論を計算式を立てて確かめてみる。

「うまくいかん。あかん……。」

何度も何度も失敗は繰り返され、あらゆる解決への糸口が、研究に打ち込めば打ち込むほど次々に消え去っていった。

「四面楚歌、奮起せよ。」

ある晩、湯川は日記帳に記した。

しかし、あとになって思えば、このころがまさにノーベル物理学賞の受賞対象となる研究の、生みの苦しみの時間帯だったのだ。

一九三四（昭和九）年九月二十一日、のちに日本の三大台風の一つと呼ばれる室戸台風が日本を直撃した。全国で数千人の死者や行方不明者が出るという大災害となった。「台風一過」とは、台風が通り過ぎて、風雨がおさまり晴天になることを意味しているが、室戸台風が通り過ぎてから関西地方は秋晴れが続いた。湯川の苦悩も晴れ渡る時がやってきた。

十月初めのある日の晩、湯川は布団の中で原子核について考えていた。その時だった。

「ジョウケンジ……。」

湯川にある寺の名前が浮かんだ。

「そうだ、子供のころ兄貴たちとよく遊んだ寺だ。」

ある時、走り回っていて桜の根元で足を滑らせて倒れ、頭を強く打った。そして、仰向けのまま目を開けた時、桜の葉の間から落ちてくる陽の光を見たことを思い出していた。

「あつ！」

湯川は布団をガバつとめくつて上体を起こした。

「あれや！」

湯川は叫んだ。

あの時、湯川は無数の光の「粒」を見たのだった。

「粒だ。陽子と中性子の間にきつと何かの粒があるんだ。これが、この二つをくつつつけているに違いない。」

湯川の頭に浮かんだ幼いころに見た光の粒が、世紀のひらめきを導いたのだった。あれだけ悩んでいた陽子と中性子を結びつけている力が見えた瞬間であった。

湯川はこの時のひらめきをもとに、その年「中間子理論構想」を発表し、翌一九三五（昭和十）年に「素粒子の相互作用について」を題する論文を発表した。

しかし、発表当時、湯川の論文は世界の物理学会で冷たくあしらわれた。欧米を中心にして発展してきた物理学に、日本などはお呼びではないといった風潮があった。ちょうどそのころは、戦争を進める東洋の野蛮な国という印象や、日本を仮想敵国とみなしていた国の反応が冷たかったという事情

もあつたらう。日本の物理学は、なかなか世界の舞台で認められることはなかった。このような状況にあつても、湯川は悲観しなかった。

あの粒のひらめきを思い出しながら、湯川はつぶやいた。

「未知の世界はまだまだ果てしなく広がっている。まだまだ、研究はこれからだ。」
湯川の目には、自信が満ちあふれていた。

* * *

一九四九（昭和二十四）年、この研究で湯川は、日本初のノーベル賞を受賞した。

西宮市苦楽園で思いついたこの粒子は、後年「ユカワ粒子」と呼ばれるようになり、陽子と中性子の中間ほどの質量であるために「中間子」と命名される。

湯川に続き同期生の朝永振一郎も、一九六五（昭和四十）年に量子電磁力学分野での基礎的研究でノーベル物理学賞を受賞し、その後も多く日本人受賞者が誕生した。

それでも日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹は特別な存在であり、戦後の日本に知的な勇気を与えた人物である。

西宮の住まいの近くにある小学校に、彼の教え子たちが建てた湯川の記念碑がある。

「未知の世界を探求する人びとは、地図をもたない旅人である」

湯川の意志は今も生き続け、記念碑に刻まれたこの言葉に励まされる研究者が、今も研さんを積んでいる。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

我が言は万人の声 齋藤隆夫

その事件の知らせに、齋藤は込み上げる怒りを抑えることができなかった。

一九三六（昭和十一）年二月二十六日未明、東京で陸軍の青年将校の一部が連隊を率いて、内閣総理大臣、大蔵大臣などの政府要人や有力な政治家を襲い、殺傷するという事件を起こした。世に言う二・二六事件である。

「これはクーデターに等しい。」

武力によつて政治を変えようとするこの事件に、齋藤は怒りと同時に強い危機感をもつた。

大正から昭和の世になるとともに、軍部は中国への進出を計画し始めた。一九三一（昭和六）年に満州事変が、翌一九三二（昭和七）年には犬養毅首相が暗殺される五・一五事件が起きた。軍部の政治への干渉は強まり、反対する者に対する弾圧もしだいに厳しくなってきた矢先に、この事件だ。

陸軍の内部抗争に端を発するこの事件をきっかけに、結果的には軍部、特に陸軍の暴走に拍車がかかった。

軍部は今まで以上に政治に干渉し、または議会を無視した。厳しい弾圧が行われ、反対意見を述べれば生命が危ないという状況だった。政治家も民衆も、日本国内の人々は、軍部に対してだれもが貝のように口をつぐんだ。

そのような状況にあつて、敢然と軍部の過ちを指摘し、誤つた道を正そうと発言する人がいた。当時の衆議院議員、齋藤隆夫である。

齋藤は一八七〇（明治三）年、現在の豊岡市出石町に生まれた。弁護士となつて、アメリカのイエール大学に留学し政治学を学んだ。武器を持った軍が政治の主導権を奪つたらどれほど危険なるか、齋藤は異国の社会構造を目の当たりにした経験から、そのことがよくわかつていた。

この年、一九三六（昭和十一）年五月七日の国会で、齋藤は、
「軍人が政治活動に加わることを許すことになると、ついには武力に訴えて自己の主張を通すことになる。そうなれば、立憲政治が滅びるだけでなく、国が乱れ、軍人の思いのままに事を決めるきつかけとなるので、軍人の政治運動は決して認めてはならない。」

という、事件と軍部の姿勢を批判する演説をした。これは肅軍演説として今も語り継がれている。軍部は政治に関わるべきではないと、正々堂々と意見を述べたわけだが、これは、当時としては相
当な勇気と覚悟がなければできないことだった。新聞でも大きく取り上げられ、多くの国民が共感した。

しかし、この演説の日を境に、齋藤のもとには身辺警護の名目で警察官がはりつき、時には軍人が家に押し掛けてくるようになった。暗殺をほのめかす脅迫状が送られてくることもあった。家族たちは齋藤の身の上に覆いかかる圧力を感じ、不安でならなかつた。

一九三七（昭和十二）年七月、日本は中国と本格的な戦争を始めた。翌年には国家総動員法が制定され、国民の生活は戦争のために犠牲を強いられるようになる。

この時も齋藤は力強く「国家総動員法は議会政治を根底から崩すものだ」と反対演説を行った。しかし、すでに日本中が戦勝ムードに包まれ、もはや耳を傾ける同志もわずかしかいなかった。

齋藤は、日本という国の行く末に大きな不安を抱いていた。しかし、彼を取り巻く過酷な環境は、彼の心身を追いつめていった。いよいよ心労のために病に倒れた齋藤は、やむなく政治家としての活動を休むことにした。

その間も戦争は拡大の一途をたどる。電力や米などの物資の供給制限、奉仕活動や軍需産業への動員など、国民の生活は苦しくなるばかりだ。戦地では多くの犠牲者を出している。

病床の齋藤には、人々が苦しむ声なき声が聞えてくるようであった。

「この戦争を、なんとかしなければ……。」

軍国主義一色になりつつある状況で、あの二・二六事件の時のような勇敢な演説を齋藤に期待する人はたくさんいた。

「この状況で、なぜ沈黙しているのか。」

という質問が齋藤の元にくるようになった。

それは、私たちの声を代弁してくれという、齋藤への国民の懇願と違ってよかった。

中国との戦争は終わりのない悪夢のように泥沼化していく。

軍部の力はますます強大になり、厳しい言論統制がしかれた。国民も新聞社も、自由に発言することが許されない世の中になっていった。それらの圧力は国会にまで及び、齋藤のように軍に反対意見を述べそうな人物は、徹底的に監視されていた。

もし軍を批判する演説をするなら、それは命がけになることを、齋藤は承知していた。齋藤は歯がゆかった。一人、考え込む日が続いた。

病状がやや回復した斎藤は、久しぶりに郷里の出石に帰った。そこには、この戦争で生命を落としたおいの墓があった。

墓に手を合わせながら、斎藤は苦しくて戦地に散ったおいの無念を思った。

墓からの帰り道、斎藤は田畑に目をやった。

出石は、秋の収穫期を迎えていた。

田や畑では農家の人が忙しく働いているが、ほとんどが女性が老人ばかりである。働き盛りの男たちは、戦争にかり出されているのだ。

農家で育った斎藤には、農繁期の苦労がよくわかる。

「これは出石だけのことではない。日本全国がこのような状況に追い込まれているのだ。」

黙々と仕事に精を出す残された人たちの姿に、斎藤は胸を絞めつけられる思いがした。

国のためだといって戦地に召集される人も、残された人も、国が何の目的で戦争をしているのか、戦争がどういう状況になっているのか、そしていつまで続くのか、聞きたくても聞けない統制の中で生きていく。

国会議員も軍部に牛耳られた政府を恐れ、だれも戦争問題について質問しようとしなない。

斎藤は一人道にたたずみ、出石の空の向こうを見つめていた。

自宅に戻った斎藤は、ついに動き出した。机に向かった斎藤は、日中戦争処理に関する国会質問の草案を書き始めた。

これが後世に語り継がれる「反軍演説」である。

推こうを重ねた原稿を、斎藤は鎌倉の自宅近くの浜辺に行つて、海に向かつて読んだ。

波の音に負けぬ大きな声で何度も何度も演説の練習をした。妻の手作りのキャラメルのおかげで、声をからすことはなかったという逸話が残っている。

一九四〇（昭和十五年）年二月二日の衆議院本会議。斎藤の演説に期待を込めた人々で傍聴席は超満員である。斎藤は凜然と演壇に立ち、原稿を一切見ることなく、堂々と一時間三十分にわたる演説をした。

「この二年半で国民が払った生命、自由、財産その他一切の犠牲は絶大である。しかもこれらの犠牲はいつまで続くのかだれにもわからない。政府はこの戦争を『世界の平和を確立するための戦い』聖戦』だと唱えているが、過去において正義を掲げた戦争で、実際に平和が得られたことは一度もない。聖戦という名のもとに、国民の犠牲に背を向け、美辞麗句を並べ立てて、戦争を止めるまたとない機会を逃し、この国の将来を誤るようなことがあれば、現在の政治家は死んでもその罪を滅ぼすことはできない。」

斎藤の演説の後、故郷出石町では、

「先生がやんなすった！」

と喜びに沸いた。多くの国民が、自分の思いを代弁してくれたと感じた。自宅には山ほどの手紙が届いた。感謝や励ましの内容がほとんどだった。

だが「時代」は斎藤隆夫を許さなかった。演説の大半が議事録から削除され、三月七日、衆議院本会議で斎藤の国会議員除名が可決された。除名が決まったその日、斎藤は、

「私の言ったことは、国民すべての声である。」

と、内に秘めていた思いを漢詩にしたためた。

それからの日本は中国との戦いだけでなく、アジア各地へ進出し、太平洋戦争へと突き進んでいく。弾圧の厳しい時代に、国会という場で、国の進むべき正しい道を示した人が先達にいるということ、今を生きる私たちは誇りとすべきだろう。

その声は、「再びあのような過ちを犯さない」という現代の国民の強い決意の礎になっているはずである。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使
用することを禁止します。

「ウラー！ タイシヨウ！」 高田屋嘉兵衛

東京のJR御茶ノ水駅の近くにニコライ堂と呼ばれる教会があります。今では高いビルに囲まれて目立ちませんが、一八九一（明治二十四）年に完成した時は、高さ三十五メートルのドーム屋根が、ずいぶん遠くからも望めたといえます。この教会をつくったのはロシア人の聖ニコライという人です。本名はイオアン・デミトリヴィチ・カサートキン。このカサートキンは、ある人物に会いたいがために、わざわざ日本にやってきたのでした。

カサートキンは、ロシアの大学生だった時に、ゴローニンという人が書いた「日本幽囚記」を読みました。ゴローニンは海軍の軍人です。彼は後で述べる事情で日本に捕らえられ、二年間ろう屋に入られていました。この本は、その間の彼の体験記でした。その本の中に一人の日本人が登場します。それが高田屋嘉兵衛です。

カサートキンは、この嘉兵衛にほれ込み、本に掲載されていた嘉兵衛の顔写真を持って日本にやってきました。

一八六一（文久元）年に箱館（現在の函館市）のロシア領事館に着任したカサートキンは、きつと休みの日を利用して、嘉兵衛の写真を持って、町中を尋ね歩いたことでしょう。

カサートキンは日本に来たところには、すでに高田屋嘉兵衛はこの世を去っていました。

なぜ、高田屋嘉兵衛という人物がロシアの一人の青年をここまで魅了したのでしょうか。それがこの話のテーマなのです。

高田屋嘉兵衛は、一七六九（明和六）年、淡路島都志（現在の洲本市）に生まれました。彼の出身地は農業で生計をたてる村でした。

海が近くにあり、実家が農家でしたが嘉兵衛は海が大好きでした。子供のころに、川の水位を潮の干満で大人に説明したという話が伝えられています。

海がよほど好きだったのでしょうか。嘉兵衛は漁業を仕事に選びました。そして漁師として船を巧みに操る技術を見につけました。数え年二十二歳の時、彼は大きな船の船乗りを目指し、島を出て兵庫へ向かいます。初めは兵庫と大坂を行き来するかわら船に乗り込み、修行を積みます。やがて、江戸に酒を運ぶ樽廻船の船頭になりました。もともと賢さと真面目さをもち合わせていた嘉兵衛は順調に出世し、一七九六（寛政八）年、自分で辰悦丸という船をつくり海運業の経営者となりました。その屋号が「高田屋」です。

嘉兵衛の才覚は商売の方面でも、航海技術や造船技術の方面でも、言ってみればあらゆる方面で優れていました。幕府から国後島と択捉島との間の潮流を調査しろと命じられ、その海域の安全な航路を発見しています。

小説「菜の花の沖」で嘉兵衛を描いた作家の司馬遼太郎さんは、ある講演会で、人の偉さというのは尺度ではかりにくいのが、その尺度を「英知と良心と勇氣」だとすると、江戸時代で一番偉かったのは高田屋嘉兵衛だと思う、と語っています。

なるほど嘉兵衛はあらゆる物事に対して才覚を発揮しました。その才覚自体を英知と言っていて良いでしょう。そして何事をするにも良心がなければ、人の信頼は得ることができません。また、当時我が

国では最大級といわれる船を建造したり、北方の海の未知の潮流を調べに行ったりと、これらは勇気がなければできないことです。

もちろんこの司馬さんの言う「偉さ」の尺度の条件は、一つ一つが別々に現れるものではなく、ひとつかたまりになって高田屋嘉兵衛という人を形づくっているのです。彼が実際にこの「偉さ」を発揮するのは、後にロシアに囚われの身となつてからであり、カサートキンはその時の嘉兵衛にあらがれて日本にやつてきたのでした。

嘉兵衛は、自分が経営していた高田屋の商売の関係で幕府との関わりがあり、一部の幕臣から厚い信頼を得ていました。当時、隣国ロシアの東方への拡張政策に神経をとがらせていた幕府は、蝦夷地を直轄地として、領土とその権益を守ろうとしていました。千島列島の潮流を調べたり、箱館の港の大規模改修をしたり、それらの仕事を嘉兵衛に託したのもそういうことに関係していません。

嘉兵衛はこれらの事業をやつてのけ、もちろん自分の商売で財を成すことにもなりましたが、そんなことは二の次というふうでした。

* * *

一連の事態は、一八〇四（文化元）年、レザノフというロシア皇帝の使節が日本に交易を求めた時、これが受け入れられなかったことに腹を立て、一八〇六（文化三）年から翌年にかけてレザノフの一行が日本の役所があつた樺太や択捉島に上陸し、略奪や放火といった襲撃事件を起こしたことに始まります。

事件から四年後の一八一一年（文化八）年、測量のため千島列島近海を航行していたロシアのディアナ号が食料を求めて国後島へやつてきました。樺太や択捉島への襲撃で神経をとがらせていた島の役

人は、幕府の命令で艦長のゴローニンを捕らえてしまします。これがゴローニン事件の始まりで、それから彼らは約二年間、松前で捕虜になるのです。

ディアナ号の副艦長リコルドはゴローニンの安否を探るために再び日本にやってきましたが、幕府は取り合いません。何とか交渉の糸口をつくろうとするリコルドは、国後島沖で日本船を捕まえます。その船こそ嘉兵衛が乗る観世丸でした。嘉兵衛は乗組員ら五人とともに、ディアナ号に移されました。この時、嘉兵衛は機転をきかせ、羽織はかまに着替えたといいます。初対面のリコルドは、嘉兵衛の出で立ちを一目見て、「ただものではない」と思ったことでしょう。嘉兵衛たちはディアナ号でカムチャツカ半島南東部にあるペトロパブロフスクという町に連れて行かれました。

嘉兵衛は、捕虜になって初めて、二つの国の外交問題について詳しく知ることになります。そして、ゴローニンを釈放しないことには、日本とロシアは戦争になると直感します。

しかし、両国の交渉の窓口は閉ざされ、解決の目処がつかない状況であることは確かでした。

嘉兵衛は、自分がゴローニン釈放のために何か役立たなければならぬと決意しました。

けれども言葉がわかりません。いくら賢い嘉兵衛も、これにはお手上げでした。彼は身の回りの世話をしてくれる十二歳の少年から、懸命にロシア語を学びました。

囚われの立場でも人間関係を重視した嘉兵衛は、ロシアの人とも穏やかに誠実に接しました。

このことがリコルドを始め、ロシアの人々の心を動かします。特にリコルドは、早い時期から嘉兵衛のこの誠実さを受け止めており、お互いに少しずつ信頼と友情が芽生えていくのでした。

「ロシアが日本に対して謝罪文を書くことで両国の関係を良くすることにつながる。自分が仲介役になろう。」

嘉兵衛はリコルドを、懸命に説得しました。

リコルドは、嘉兵衛の真剣な申し出を受け入れます。

そしてリコルドは、本国の高官と相談するため、往復四十日間の道のりをそりに乗って旅立ちました。

嘉兵衛は国と国との戦争を防ごうと必死でしたが、一方では同じく捕虜となつた五人の仲間の身上を心配していました。カムチャツカの冬は厳しく、氷点下三十度を下回ることもたびたびあります。太陽が顔を出す時間も少ない酷寒の地で、三人の仲間が次々と病気で倒れました。懸命の介抱のかわくなく、三人は亡くなりました。嘉兵衛は大きな責任を感じるのです。

やがて、リコルドが戻ってきました。海軍の高官との話がついたので。

ロシア側が謝罪文を書くことを認め、リコルドはその書面を持って戻ってきたのです。

この時嘉兵衛は、残つた二人の仲間を帰国させてやることができると、ひそかに喜びました。

しかし、最後に大きな問題がありました。ロシアは承知していても、嘉兵衛の国、つまり幕府側は嘉兵衛が交渉に当たることを知りません。日本は鎖国状態で、異国の捕虜となつていた人間でも、帰国後、厳しい仕打ちが待っているという時代です。

「本当の勝負はここからだ」と嘉兵衛は腹をくくりました。

日本ヘデアアナ号で近づくことは危険ですから、嘉兵衛は小さなボートで上陸します。そのまま逃げてしまうかもしれないのに、リコルドはそうさせました。いかに嘉兵衛を信頼していたか、ということでしょう。

案の定、嘉兵衛は役人に捕らえられ、取り調べを受けます。異国への渡航はどのような場合もご法度ですから、これは仕方ありません。嘉兵衛は罪人扱いされながらも、役人に必死で事情を語ります。両国の誤解を解くための、嘉兵衛の懸命の説得が続きます。

幸いだったことに、調査にやってきた幕府の役人は、かねてからの知り合いです。ほぼ一カ月後、ゴローニンたちの無事を確認することができ、幕府側の理解を得ることができました。

交渉が成立したことを知らせるために、嘉兵衛は再びディアナ号に戻ります。待ち受けていたリコルドと嘉兵衛は抱き合いました。

ディアナ号の乗組員たちも歓喜に満ち、嘉兵衛を迎えました。

やがて、ゴローニンが釈放されることになりました。

二つの国のために、懸命に役割を果たした嘉兵衛の大仕事が終わったのです。それは、互いに信頼を寄せ合った嘉兵衛とリコルドの、そして嘉兵衛とディアナ号乗組員との別れでもありました。

カムチャツカで嘉兵衛といっしょに囚われの身となった彼の仲間たちが、嘉兵衛を「タイシヨウ」と呼ぶのにならって、リコルドも他の乗組員たちも彼のことを親しみと尊敬の気持ちを含めて「タイシヨウ」と呼んでいたといいます。

ゴローニンを乗せたディアナ号を見送る嘉兵衛に、乗組員たちが大声で叫びました。

「ウラー！ タイシヨウ！」

「ウラー！ タイシヨウ！」

嘉兵衛も遠ざかるディアナ号に手を振りながら叫びました。

「ウラー！ リコルド！」

* * *

帰国後、ゴローニンが著した「日本幽囚記」に、自分と嘉兵衛との関わりについてリコルドが寄せた文が載っています。

リコルドは、嘉兵衛を一人の人間として高く評価し、その信頼がゴローニン事件解決の礎になったとつづりました。

その、英知、良心、勇気をもち合わせた「タイシヨウ」が、理想の人間として、若きカサートキンを感動させたのでしよう。

幕末、外交交渉が難しい時期に、勝海舟が淡路島の沖を船で通った時、

「語らわん 人こそなけれ 淡路島 浜辺の桜 花咲きにけり」と読んだといわれています。

新しい時代が到来しようとしている時、嘉兵衛が生きていたらこの時代をどう考えただろうと、嘉兵衛のいない浜辺の桜を見て、彼の外交手腕をしのぶ勝の思いがこもっています。

司馬遼太郎さんは同じ講演会で、嘉兵衛のことを、

「いま生きていても、世界のどんな舞台でも通用できる人だ。」と、言っています。

嘉兵衛は故郷の淡路島で五十九歳の生涯を閉じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

心がひとつに

震災前は、まさかあんな形で卒業式を迎えるとは思いませんでした。

平成七年三月十三日、仮設住宅の建設が進む校庭の白い大きな仮設テントで、卒業式は始まった。三年二組、男女あわせて三十七人。亡くなった北井さんは、笑顔で吉村さんの胸に抱かれて出席した。

卒業証書授与の時になった。一組が終わって、二組。先生が一人一人の名前を呼び、証書を受け取りに行く。河原さんが証書を受け取ったところで、先生の声が詰まった。声は震えていた。

「北井千香子。」
「はい。」

三年二組全員の声がテントいっぱいに響いた。心がひとつになった。みんな考えていることは同じだった。私は自分のときよりも大きな声を出した。クラスみんながいたから、みんないっしょだと思っただけで、安心して胸を張って返事ができた。私たちの中で千香子だけがよみがえった。

卒業を前にクラス討議をして、「北井さんのときは、全員で起立して返事をしよう。」と決めた。反対する人はだれもいなかった。もちろん本番も気をぬいた人なんていなかった。

その瞬間、三年二組の一員で、この最高のクラスの一人一員で、本当によかったとつくづく思った。

式歌の合唱のときは、いろいろな思いを込めて歌った。「この合唱が終わったら卒業してしまうんだなあ。」という実感が徐々にわいてきた。もうこのクラスともお別れなんだと思うと、何だかとても寂しくなった。

最後の「礼」、練習のときにはなかったのだけれど、誰からもなく、

「言おう。」

と言いだして、卒業生全員で、

「ありがとうございます。」

と本当に心を込めて言った。お世話になった先生方をはじめ、くす玉や花束を作って祝ってくださった避難されている方々や、三年間学んだ学校で卒業式を行えるようにしてくださった方々への感謝の心を込めて。そして何より、震災後はそれぞれに苦しみを抱えていたけれど、みんなで励まし、支えあつて一生懸命生きてきた友だちに対して。

式後、教室にもどつてもう一度「マイウェイ」をクラスのみんなで合唱した。毎日、教室に置かれた北井さんの写真を見ながら、「地震を体験して、得たものも大きいけれど、人の命だけは奪つてほしくなかった。」と、思い続けていた。でも、「マイウェイ」を歌いながら、「千香子の分もがんばるんだ。」という思いがわきあがってきた。

卒業式から一週間たつて、ク

の人たちで北井さんのお墓参

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ラスの全員とテニス部に
りに行った。

日本民俗学の創始者

日本民俗学の創始者として有名な柳田國男は、福崎町の辻川で一八七五（明治八）年、松岡家の六男として誕生しました。近代産業の起る前で、人々の生活は農業や漁業を中心としていました。国民の多くが貧しい生活ながらも、お互いが助け合って生きていました。

柳田はこうした庶民の生活と文化の事実から歴史を研究しようとして日本民俗学を打ち立てたのです。

過去の人類の生活や文化のを知るための研究は、文字が作られるまでのことは遺跡や遺物をもとにして研究します。これは考古学という学問が用いる方法です。文字が作られた後は、書き残された文、つまり文献をもとに

して過去のことを明らかにしようとしません。これが歴史学という学問が用いる方法です。

これに対して民俗学は主に民間の伝承などを研究材料にします。柳田がなぜこういう研究方法を用いたのかと言えば、文献には多くの一般庶民（常民）の日常的な生活や文化はほとんど書かれていません。文献だけを頼りにすると一般庶民を抜きにした歴史になります。そこで柳田は民間の伝承などを調査して一般庶民の生活と文化の発展の歴史を研究する学問の体系を創りあげたのです。つまり、柳田は、文献に残されたものだけでは、本当の歴史はつかめないと考えたのです。むしろ様々な地域で残っている伝承などの中に庶

民のありのままの生活や文化が生きていると考えたわけです。ですから柳田の研究は、方言や昔話、民間説話など実に多方面にわたっています。

では、柳田がこういう学問を打ち立てようとした動機は何だったのでしょうか。この点に焦点を絞って柳田國男の人生を探訪してみましよう。

*

國男の生家の松岡家は代々医を業としていましたが、祖父の代から一家は次第に貧乏の度合いを加えました。後年、柳田國男自身が「私の家の小ささは日本一だ」「じつは、この家の小ささ、という運命から、私の民俗学への志も源を發したと言ってよいのである」と語っています。

こうした狭くて貧しい家に生まれた國男ですが、兄弟はみな助け合つてよく勉強したようです。だから國男の兄弟は傑出した人物揃いです。ここではそのことに詳しくは触れませんが、皆さん自身で調べてみるとよい勉強になるでしょう。

さて、國男の人生に話を戻しましょう。國男は五歳で十五歳年上の長兄鼎が校長をしていた辻川の昌文小学校に入学し、十才で卒業します。この年に、一家は家と地所を売り払つて現在の加西市に引越しました。そのお金で長兄鼎は東京帝国大学の別科に進み医者になります。

國男は十一歳で辻川の高等小学校に入学します。北条の両親の元を離れて辻川の豪家三木家に預けられたのです。國男は後に、たぶん家が貧しくて育てにくかつたためであろうと話しています。この三木家にはたくさん書物があつたので、これをむさぼり読んだようです。

この年に飢饉を経験します。國男自身は「その経験が私を民俗学の研究に

導いた一つの動機ともいえるのであつて、飢饉を絶滅しなければならぬという気持ちで、私をこの学問に駆り立て、かつ農商務省に入らせる動機にもなつた」と語っています。また、後に東京帝国大学時代に飢饉に備える「三倉」（義倉、社倉、常平倉）の研究をしたのも同じ動機からであつたと語っています。

*

國男は十三歳の時、茨城に住んでいた長兄に引き取られ、利根川の近くの布川に住むことになりました。ここで二年間を過ごし、その後十六歳からは東京の御徒町に住んでいた九歳年長で医師の次兄通泰の家に移ります。この頃兄の友人であつた森鷗外の「しがらみ草子」に寄稿したり、田山花袋と交わつたりしています。

この頃、國男自身は大学には行けないと思ひ、お金のからない商船学校へ行こうかと考えていたところ、兄二人が学費と生活費を分担するつもりでいることを知り、大急ぎで中学校卒業の資格を取つて、第一高等学校へ進み、

その後二十三歳で東京帝国大学法学部に入学します。

この年の夏に伊良湖岬に旅をし、そこで拾つた椰子の実のことを友人島崎藤村に話したのがもとになつて「椰子の実」の詩が生まれました。

大学を卒業すると同時に農商務省に入ります。そして二十七歳で柳田家の養子となります。

*

官界に入つてからはいろいろな役職に就きますが、日本民俗学創生のもとになるのは農商務省時代に全国を回り農民の生活をつぶさに見たことでした。

しかし一方では生き方に迷うことが生じてきます。柳田は語っています。役人として「国のために農業の方策を討究すべき職責を負うと同時に、他の一方においてはそれぞれの農民の利益を代表して公にこれを主張せねばならぬ」と。

この矛盾に行き当たり、彼は官を辞して民間人として民俗学に専念する道を選びます。柳田四十九歳のことでした。

運命の木 姫路城の大柱

「これは、かえなあかん。しかし、こんなまつすぐで、大きな木があるやろうか。」
高さ二十五メートルもあるまつすぐな大柱である。この大柱の交換に、改修の成否がかかっているのは明らかだった。

一九五六（昭和三十一）年、老朽化が激しく崩壊の危機に直面した姫路城の天守閣をよみがえらせようと、市民五万人の署名に後押しされた「昭和の大改修」事業が始まった。

改修の総指揮者である加藤得二は、城の中で腕組みをして、そびえ立つ柱を見上げていた。

姫路城の天守守は、地階から地上六階の床下まで東と西にある二本の大柱に支えられている。その西の大柱の内部が著しく腐食していた。

加藤は腕組みをしたまま思索していた。条件に合ったひのきを探すことは難しいと感じていた。一方で、日本は森林国なのだから、絶対に見つかるはずだという期待もあった。加藤は木材業者に依頼し、兵庫県下のみならず、ひのきが生えている山々をあたらせた。しかし、条件に合うひのきを探し出すのは容易ではなかった。

そこへ、思いがけない知らせが入った。条件に合う木が見つかったのは、森林ではなく、ある神社の境内だという。それが笠形神社の「ご神木」だった。

牛尾四郎の住む神崎郡瀬加村（現在の市川町）の笠形神社の境内に樹齢六百年にもなる大きなひのきがそびえている。

村人はご神木として、この木を代々にわたって大切にしてきた。村の世話役の牛尾のもとへ、加藤がやつてきた。そして、彼は事情を話した。姫路城の大柱を使うために、ご神木を譲ってくれと牛尾に懇願した。

「何をあほなことを言い出すんや。そんなことできるわけないやろ！」

牛尾にも、このご神木には幼いころからの思い出がある。そして何よりも村の守り主だ。

冗談ではない、という怒りにも似た感情が沸き起こった。

しかし、瀬加村を訪れた加藤の熱心な説得に牛尾はしだいに心を動かされていった。牛尾自身、戦地で何とか生き残りしようすいして姫路に戻った時、戦災をまぬかれた姫路城の白く美しい姿に、強く心を励まされたことを思い出していた。確かに、あのお城を崩壊させてはならないと思った。

牛尾は村人を説得してみることを、加藤に約束した。

「それは、あかん。」

「何をあほなことを言い出すんや。そんなこと考えられへん。」

牛尾が話し終える前から、村の寄り合いは騒然となった。それは、牛尾が加藤得二から初めてこの話を聞いた時の衝撃と同じだった。

寝耳に水の話に、村人たちは猛反対した。

牛尾は何度も何度も寄り合いをして根気強く語った。

だれにとつても難しい決断だった。

やっと村人全員が合意した。

「ご神木を切るやなんて、確かにとんでもないことや。でもな、わしらの宝でもある姫路のお城の大柱として、長く長く大切にしてもらえのと違うか。」
瀬加村の人たちの厚意に、加藤は涙が出る思いだった。
はやる思いを抑えながら、笠形神社に向かった。

「この木ならば……。」

加藤は、そびえ立つひのきを見上げ胸が躍った。さつそく木の状態を調べた。

すると、予期していないことがわかった。天に向かつて一直線に伸びているように見えるそのひのきのかかなり上の部分に、わずかながら反りがあることがわかったのだ。

大柱は「まっすぐ」であることが不可欠の条件だった。加藤は、肩を落とした。

そして、集まってその様子を見つめていた村人たちに深々と頭を下げた。

「せっかく皆様に重い決断をしていたいただいたのに、申し訳ない。わずかな反りがあって、この木は……。」

加藤の失望は言葉にならなかった。村人たちに丁重にわび、笠形神社を後にした。
帰り道、加藤は何度も何度もそのご神木を振り返った。

改修の現場で、そのひのきの到着を待ちわびていた大工たちの失望も大きかった。

「これじゃ、改修は無理と違うか？」

「これだけの木は、やはり見つからんのか。」

大工の大集団を仕切っていたのは、棟りょうの和田通夫だった。彼はいら立ちを見せ始めた大工たちと言った。

「みんなが焦るのはわかる。でもな、加藤さんは我々の気持ちも分かる人や。きつと大柱になる木を見つけてくる。待とうや。」

大柱になるひのきを探し求めて一年、一九五九（昭和三十四）年の初春の段階で改修事業はストップしていた。大柱になる木が見つからないことには、先に進まないのである。

百名の大工たちは、ひたすら待機していた。

大柱のひのき探しは続いていた。加藤は木曾山中に目星をつけた。地元の林業関係者、営林署職員らが巨大なひのきを探した。協力してくれる人たちは、

「我々で姫路城の大柱になる木を見つめよう！」

と、道のない山中を探し、だれも足を踏み入れたことのないような奥深い斜面にも足を運んだ。これが最後の機会と、加藤も腹を決めていた。

しかし、なかなか見つからない。一カ月が経ったが、やはり駄目である。

「もうそろそろ潮時では……。」

そんな声が耳に入ってきたが、加藤は粘った。

「もう少しだけやらせてくれ。」

協力者たちも加藤の熱意に応えようと、また山に入っていた。

そんなある日、一人の作業員が道に迷って獣道に入り込んでしまった。そしてそこで巨大なひのきを見つけたのである。

その知らせを受けた加藤は、現場に急行した。確かに巨大なひのきがそびえ立っている。これなら、いける。」

加藤は確信した。懸念した反りもない。

「これで姫路城を修復できる。」

加藤は、その巨木に手を合わせていた。

奥深い山中で、加藤は伐採までを見届けた。

そして姫路に戻り、巨木が搬送されるのを待つことにした。

久しぶりに我が家に戻った加藤は、安ど感に包まれていた。これでストップしていた改修作業が再開できる。崩壊の危機にある姫路城を救うことができるのだ。加藤は、風呂につきりながら、これまでの日々を振り返っていた。

風呂上がりの加藤に、一通の電報が届いた。加藤は電報を読み、がく然とした。

「シンバシラ オレタ ムネン」

ひざから崩れ落ちた加藤は、しばらく電報を握りしめたまま、動けなかった。

巨大なひのきは山の斜面を慎重に運ばれたが、もう少しで平たんになるところで落下し、あつけなく真つ二つになったという。あれだけの時間をかけ、数え切れないほどのたくさんの方の協力を得て探し当てたひのきは、もはや大柱として使えなくなってしまった。

加藤の落胆は激しかった。

「万事休すだ……。」

加藤はふさぎ込んでしまった。

棟りょうの和田が訪ねてきたのは、加藤が電報を受け取った数日後だった、大きな風呂敷包みを抱えていた。いぶかる加藤の前で和田はにやりと笑い、その風呂敷をほどいた。

包みの中から出てきたのは、凹凸で組み合わされた木組みの模型だった。

「加藤さん、この手があるよ。短くなってもこうして二本をうまくつなぎ合わせることができれば、立派な一本の木になる。」

「つなぎ……合わせる……。」

「そうや、まだあきらめたらあかんで。」

木組みの模型を見つめていた加藤は、視線を和田に移した。そして大きくうなずいた。

加藤はすぐに現場へ向かった。落下現場で折れたひのきを見た。一本の柱としては使えないが、幸い折れ口がきれいで、手を加えればもう一つの木とつなぎ合わせることが可能だった。

「もう一つの木……。」

加藤はその足で瀬加村に向かっていた。道中、複雑な心境だった。村の人々に重大な決断を迫りながら、わずかな反りのためあきらめざるを得なかった笠形神社のご神木。

果たして今さら、この木組みの案を受け入れてもらえるのだろうか。

牛尾に会うのは久しぶりだった。

加藤は村の人たちに事情を話した。

「加藤さん、このご神木お譲りいたします。姫路城の大柱としてお使いください。わしらの大切なご神木や。どうか、よろしくお願いいたします。」

牛尾が言った。

あの時、村の人たちの総意で腹を決めたのだ。この申し出を断る理由はなかった。

「大事なご神木、大切に使用させていただきます。」

そう言つて、加藤は牛尾の手を固く握つた。

その年の夏、笠形神社のご神木と、木曾山中の折れた巨木が、姫路市内を祝い引きされた。およそ十万人の市民がその二本の木を見ようと、沿道を埋めた。

九月、棟りよう和田の指揮の下、腕の良い大工たちの技でその二本の木の木組みが行われた。その木組みには、ご神木を譲る決断をしてくれた瀬加村の人たちや、残雪の奥深い木曾山中をひのきを求めて歩き回つてくれた人たちの願いが込められている。

加藤は祈つた。

つなぎ合わせの部分の巧みに凹凸になつた二本の木を巻いたロープを、大工たちがこん身の力で引いた。そして、その二本の木は、まるで一つの大柱になることが運命づけられていたかのようになり、見事に木組みされ、一本の巨木になつた。

姫路城は姫山に天守閣が、鷺山に西の丸が築かれた平山城で、日本における近世城郭の代表的な遺構である。白鷺城とも呼ばれ、現存する城としてはその美しさにおいて他をりようがする。

一九九三（平成五）年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

天守をいただいた純白のたたずまいは、見る者だれをも魅了する。

しかし、半世紀以上も前、多くの人の情熱によって木組みされた二本の運命の木が西大柱となつて、この美しい城を支えていることを知る人は少ない。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。